

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
一七八〇	安永9	1/2~	江戸 外記座	碁太平記白石噺 十一段	<p>第一（口 枝、奥 千代）、第二（口 町、奥 倉）、第三（口 兵庫、中むら、奥 佐渡、御目見江出語り下り 房=下り 藤五郎）、第四（口 元、奥 島）、第五（口 音、奥 紋）、第六（喜代）、第七（口 真志、中 紋、奥 カケ合 島・むら・喜代・倉・真志・紀志・紋、御目見江出語り下り 八重=富八）、第八（口 倉、奥 島、跡 豊）、第九（道行 佐渡・紀志、跡 音）、第十（口 むら、奥 八重）、第十一（沢）。</p> <p>※角書「姉は宮城野ノ妹はしのぶ」。</p> <p>※語り「武名に功を立たる男は六十余州を岡目八もくはねかける いもせの中手は恋に目をもつ一間飛北朝にわたる南朝の勢ノ親への孝を立たる女は五十四郡にたつた一もく打てとる かたきの奥の手だかれて寝ばまの睦言はしてうにかゝる五丁町の賑」。</p> <p>※追加番付に「来ル三日より 碁太平記白石噺 第八段目 敵討の段（かけ合 紋・下り 須磨・むら・豊・島=藤三郎）ノ大仏殿 三の口 梅川忠兵衛恋飛脚（出語 八重=富八）」、同口上に「十段目道具出来兼候二付右出来迄の内御ひいきの御方様より御好二付一日がわり二出語取かへ相勤…」とあり、十段目（正本によれば、九・十段目）が後から上演されていることを示す。正本も第八までのもの（大阪府立中之島図書館蔵）と、完結しているもの（京都大学図書館蔵）とがある。</p> <p>※絵尽の第三と第四の間に「梅川忠兵衛けいせい恋飛脚 下の巻 下り 竹本八重太夫 三絃野沢富八 御目見江出語り大できノ」とある。第十の最後に「大切迄八重太夫大あたりノ」とあって、第十一に当る部分はない。また第七の終りに「此跡は追而出板仕御覧に入可申候以上」とある。</p> <p>※正本（大阪府立中之島図書館及び京都大学図書館蔵、西宮新六版七行）の見返にある太夫役割は次の通り。第一（口 枝=元吉、奥 千代=小三太）、第二（口 町=此八、奥 倉=市次郎）、第三（口 兵庫=繁六、中 むら=藤三郎、奥 佐渡=太八）、第四（口 元=政五郎、奥 島=富八）、第五（口 音=藤三郎、奥 紋=富八）、第六（喜代=市治郎）、第七（口 真志=太八、中 紋=富八、奥 かけ合 島・村・喜代・新・真志・千代・紋=藤五郎）、第八（口 倉=繁六、奥 島=藤三郎、跡 豊=清治、須磨=太八）、第九（音=藤三郎、道行 佐渡・ツレ 千代=藤五郎）、第十（口 むら=藤三郎、奥 八重=富八）、第十一（喜久）。</p> <p>※番付（追加番付も含む）と絵尽の役割の異同は次の通り。「第四」の前、「下り 豊竹房太夫」の代わりに「下り 豊竹八重太夫」、「第四」に豊竹元太夫はなし、「第七」の奥は「惣太夫かけ合」とのみ、「第八」の「跡」を「切」とし、豊竹須磨太夫を加える。「第九」は豊竹紀志太夫の代わりに豊竹千代太夫、また豊竹音太夫はなく、「第十一」もない。</p>	宇治常悦（東九郎）、金江谷五郎（京蔵）、伊賀台七（喜三郎）、百性与茂作（三十郎）、娘しのぶ（金三郎）、庄や七郎兵衛（冠二）、女ぼうおさよ（音五郎）、どぢやう（喜三郎）、大福や惣六（東九郎）、ぜげん勘九郎（京蔵）、鞠ヶ瀬秋夜（三十郎）、けいせい宮ぎの（音五郎）。
一七八〇	安永9	(2) /3~	江戸 外記座	碁太平記白石噺	※前項の追加番付にある「来ル三日ヨリ」は2月3日をさすか。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一七八〇	安永9	9/16~ 10/10	甲府	碁太平記白石噺 ※角書「姉はみやきの／妹のしのぶ」。 ※『峡中劇場記録』（山梨県立図書館蔵）に拠る。	常悦（文吾）、谷五郎（伊三郎）、志賀団七（喜三郎）、与茂作（三十郎）、おのふ（金三郎）、庄屋（冠次）、与茂作女房（東九郎）、百々蔵のどしやう（新七）、官九郎（伊三郎）、みやきの（音五郎）。
△	一七八〇	安永9	11/30~	北堀江市ノ側 芝居 豊竹此吉座	（碁太平記白石噺） 明神森の段（折、鶴）、石堂館の段（品、梶）、田植の段（八、房）、逆井村の段（品、頼）、新吉原の段（かけ合 此・頼・村・品・初・鶴・其）。 ※『近世邦楽年表 義太夫節之部』に拠る。 ※『近世邦楽年表 義太夫節之部』は天明元年に掲げるが、『浄瑠璃大系図』竹本八重太夫（三世・当時湊太夫）の条、次項の天明元年春興行との関連から、前年の安永9年と推定。但し、次項の番付とは、座組配役にやや相違があり、引続いての興行と断定するには疑問も残る。この興行を天明元年11月とする可能性も考慮に入れるべきであろう（『義太夫年表 近世篇』）。	常悦（元五郎）、谷五郎（乙五郎）、志賀台七（乙五郎）、与茂作（久次郎）、信夫（菊治）、おさよ（小八郎）、惣六（元五郎）、傾城宮城野（重五郎）。
△	一七八〇	安永9	11前後カ	座摩宮御社内 芝居	（碁太平記白石噺） ※黒石陽子「早稲田大学演劇博物館所蔵黒木勘蔵旧蔵透写浄瑠璃番付について（三）（安永～寛政）」（『演劇研究』第21号）に拠る。	
	一七八一	天明1	春	口り江市のか は芝居 豊竹此吉座	碁太平記白石噺 全部十二冊 第壹 井手の里の段（常）、第貳 明神の森の段（入）、第三 石堂館の段（浦、此、麓）、第四 田植のたん（早、八重）、第五 逆井村の段（品、頼）、第六 浅草のたん（湊）、第七 新吉原のたん（町、此、かけ合 頼・湊・町・入・品・浦・此）、第八 屋敷の段（頼、麓）、第九 敵討のたん（かけ合 入・品）、第十 まつり之段（町）、第十一 紺屋の段（湊、八重）、第十二 笠置山の段（浦）。 ※角書「姉は宮城野／妹はしのぶ」。 ※語り「北朝の軍勢揃は花やかなりけるお姫さまの口のさい口口ふれやふる／\やさ姿の奴が大望に声にぎはしくも諷ふしづの女の田うへ歌は揃ひも揃ひし孝心のかたきうち／南朝の軍勢揃は見事なりけるくはの大よせいろも香もある山吹ながしの旗の紋に四海をなびかす工夫にわたるしづの男の惣大将はちかひにちかひし神木のしなへうち」。 ※安永9年11月30日初日「碁太平記白石噺」の、配役の一部を変えた完全通し上演。 ※『闇の磔』に多数の当興行出演者の評、および挿絵（人形遣いの役割を記す）掲げる。 ※この時の、第五「逆井村の段（頼太夫場）」、第七「新吉原の段（此太夫場）」、第八「碁の段（頼太夫場）」、第八「屋敷の段（麓太夫場）」、第十一「紺屋の段口（八重太夫場）」の六行抜本がある。『外題年鑑 寛政版』に「碁太平記白石噺 同（天明元）年は七つ目丸一段新作此太夫場」とあるのは、この時、七つ目などの詞章が一部改められたためである（千葉胤男「義太夫節の正本の異同について」昭和54年春日本近世文学会発表）。	宇治常悦（友五郎）、谷五郎（音五郎）、伊賀台七（林三郎）、与茂作（久次郎）、おのぶ（菊治）、庄や七郎兵へ（元五郎）、おさよ（小八郎）、貫九郎（正次郎）、まるがせ秋口（元五郎）、宮きの（重五郎）。

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
一七八一	天明1	閏5/9～	伊勢 いせ古市常大 芝居 竹本義太夫座	碁太平記白石噺	明神森の段（為）、石堂館の段（弓、初、度）、田植の段（為、千賀）、逆井村の段（弓、組）、新吉原の段（伊和、政、かけ合 千賀・伊和・初・弓・為・度）、やしきの段（千賀、中）、敵打の段（伊和）、紺屋の段（初、岡）。 ※角書「姉は宮城野／妹はしのふ」。 ※『伊勢歌舞伎年代記』の記述によれば、閏5月21日から大切に「姫山姥」が加わり、さらに閏5月25日からそれが「形見葱摺」の景事に差し替えられたものと考えられる。但し、25日から「姫山姥」もともに上演され、付け物が2本であった可能性もあり、また21日および25日からの興行の建狂言が「碁太平記白石噺」であったとの確証もない。	宇治兵部の介・宇次常悦（才治）、金江谷五郎（門蔵）、志賀台七（弥三郎）、百性と茂作（伊三郎）、しのぶ（大蔵）、庄屋七郎兵衛（門三郎）、おさよ（磯五郎）、てい主惣六（門蔵）、鞠ヶ瀬秋夜（音蔵）、せいせい宮ぎの（磯五郎）。	
△	一七八一	天明1	6/24～	越前 牧島 政右衛門座	（碁太平記白石噺）	※土田衛「『橋宗賢伝来年中日録』芸能記事抄」（『芸能史研究』第102号）に拠る。	
△	一七八三	天明3	1	座 摩 社 内	（碁太平記白石噺）	※『浄瑠璃大系図』の豊竹此太夫の条に「同（天明）三年癸卯正月一座ざま社芝居へ引越にて式三番出語り出づかひにて碁太平記白石噺三番叟と新よし原相勤るなり」とあり、また「同三年座摩社内にて白石噺是は市の側芝居建替普請故其間也」とあり、豊竹八重太夫の条に「白石噺同三年癸卯年東京より帰阪有て正月江戸土産としておしゆん伝兵衛猿廻しを出し古今の大当りせしとぞ」とあるに拠る。	（不明）
△	一七八三	天明3	4/6～	座 摩 社 内 豊竹此吉座	（碁太平記白石噺）	九冊目（品）、十冊目（湊、八重）。 ※『近世邦楽年表 義太夫節之部』及び東京藝術大学附属図書館蔵「近世邦楽年表基本カード」に拠る。 ※黒石陽子「早稲田大学演劇博物館所蔵黒木勘蔵旧蔵透写浄瑠璃番付について（三）（安永～寛政）」（『演劇研究』第21号）に番付原本の報告あり。 ※人形役割は黒石報告に拠る。	じやうゑつ（元五郎）。
一七八一 ～ 一七八五	天明前 半	3下旬～	伊勢 松坂川原町	碁太平記白石噺 八冊物	第壹 明神森の段（錦）、第貳 石堂屋かたのたん（杣、絹、町）、第参 田植の段（文、伊）、第四 逆井村の段（町、式）、第五 新吉原の段（谷、湊、掛ヶ合太夫のこらす）、第六 常悦やかたの段（伊、絹）、第七 かたき討の段（文、杣）、第八 こん屋の段（湊、谷）。 ※角書「姉は宮城野／妹はしのふ」。 ※番付に年次の記載を欠くが、大阪初演の安永9年末から天明元年春以後と考えられる。下限は、野沢吉五郎が8年5月に吉兵衛と改名しているので、それ以前であろう。未詳ながら、一応天明前半とみなしておく（『義太夫年表 近世篇』）。 ※番付の第壹の「錦太夫」を墨書で「仙太夫」に、第貳・第七の「杣太夫」を「仙太夫」に改めている。また人形遣いの「中村源兵衛」を「中村源三郎」に改め、「宇治瀬治郎」の「瀬」も墨書である。	宇治常悦（仲治）、かなへ谷五郎（庫十郎）、志賀台七（源十郎）、与茂作（利兵衛）、おのふ（源三郎）、七郎兵衛（元吉）、おさよ（新蔵）、宗六（庫十郎）、丸橋秋夜（元吉）、宮城の（助三郎）。	

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
一七八七	天明7	3/21~	京 四条南側芝居 豊竹此吉座	碁太平記白石噺 全部十式冊	明神森の段(入)、石堂やかたの段(若、品、磯)、田うへのだん(君、湊)、逆井村の段(品、頼)、浅草の段(湊)、新よしはらのだん(伊、此、かけ合 頼・湊・伊・品・入・此)、屋しきの段(磯、時)、敵討の段(かけ合 磯・伊・入)。 ※角書「姉は宮城野ノ妹はしのぶ」。	宇治じやうゑつ(冠蔵)、たに五郎(虎蔵)、しがたん七(乙五郎)、百しやう与茂作(源治)、しのぶ(十蔵)、庄や七郎兵へ(国八)、おさよ(吉十郎)、ていしゆ惣六(冠蔵)、くはん九郎(竹八)、丸かせしや(虎蔵)、けいせい宮ぎの(十三郎)。
△一七八七	天明7	8/12~	北の新地芝居 豊竹此吉座	(碁太平記白石噺)	※『外題年鑑 寛政版』に「碁太平記白石噺 同(天明七年)八月十二日 北の新地芝居にて 座本豊竹此吉 太夫豊竹此太夫 豊竹頼太夫 豊竹百合太夫 豊竹時太夫 鶴沢寛治」とある。なお『浄瑠璃大系図』豊竹磯太夫の条に「同(天明七年)八月十二日より北新地芝居にて白石噺」とある。	
一八〇〇	寛政12	10/3~	道頓堀東芝居	碁太平記白石噺	田うへのだん(口 民、おく 八重)、逆井村のだん(口 雛、切 此)。 ※「振袖天神記」「小栗判官車街道」「猿曳門出のひとふし」「ひらかな盛衰記」「加賀見山旧錦絵」のうち、「ひらかな盛衰記」を「碁太平記白石噺」に差し替えた番付に拠る。	宇治常悦(門蔵)、谷五郎(定蔵)、しがだい七(清二)、よもさく(秀五郎)、娘しのぶ(東二)、七郎兵衛(岩五郎)、おさよ(勢蔵)。
一八〇八	文化5	8/20~	てんま天神芝居	碁太平記白石噺	田うへの段(薫)、新吉原のだん(口 芳、切 土佐)。	常ゑつ(文子)、しがだい七(熊吉)、与茂作(東吉)、しのぶ(金吾)、七郎兵へ(文三)、大ふくや惣六(三郎兵衛事 文吾)、みやぎの(新吾)。
一八〇九	文化6	10/12~	北ほり江市の側芝居	碁太平記白石噺	新よしはらの段(口 吾、切 土佐)。	しのぶ(東蔵)、宗六(音五郎)、宮城野(辰造)。
一八一〇	文化7	8/20~	道頓堀大西芝居	碁太平記白石噺	明神の森のたん(伊勢)、田うへのだん(口 道、おく 吾)、逆井村の段(口 絹、切 氏)。 ※この興行には演目が異なる複数の番付があり、その中のひとつに拠る。	宇治常悦(冠三)、金井谷五郎(千次郎)、しが団七(新二)、百しやうよも作(東吉)、むすめおのぶ(才次郎)、庄や七郎兵へ(千四)、よもさく女房おさよ(東蔵)。
一八一〇	文化7	9/25~	御 霊 社 内	碁太平記白石噺 大序より 七つ目まで	大序(嵐)、明神の森の段(由良)、石とう館のだん(口 定、次 千代、中 新、切 伊達)、田うへのだん(口 由良、中 多賀、おく 新)、逆井むらのだん(口 綾、切 鐘)、浅草のだん(伊達)、新よしわらの段(口 倉、切 土佐)。 ※角書「姉は宮城野ノ妹はしのぶ」。	常悦(重五郎)、金井谷五郎(冠四)、しがだい七(本五郎)、与茂さく(紋蔵)、妹しのぶ(三吾)、庄や七郎兵へ(豊吾)、おさよ(東十郎)、大ふくや宗六(豊吉)、かん九郎(正三)、宮ぎの(紋蔵)。
一八一―	文化8	2/19~	名古屋 稲荷御社地大 操芝居	碁太平記白石噺 巻冊目より 七冊目迄	明神森の段(十七)、楠原屋舗の段(式、灘、重)、田植の段(岑、錦)、逆井村の段(綾、土佐、中)、浅草の段(綾)、新吉原の段(灘、土佐)。 ※角書「姉は宮城野ノ妹は信夫」。	宇治常悦(重五郎)、金江谷五郎(虎蔵)、志賀台七(元五郎)、百しやう与茂作(文蔵)、妹しのぶ(重五郎)、庄屋七郎兵へ(冠四)、女房おさよ(伝七)、どじやうつる吉(重五郎)、大ふくや宗六(文蔵)、きもいり貫九郎(冠作)、まりかせ秋夜(冠作)、けいせい宮ぎの(伝七)。

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
一八一二	文化9	4/14~27	伊勢 勢州中の地蔵 町常芝居	碁太平記白石噺 十冊物	発端（機、三保）、明神の森段（律）、楠原やしきのだん（口 三保、中 千賀、切 氏）、田うへのだん（口 律、奥 筆）、逆井むらのだん（口 八重、中 土佐、切 中）、浅草の段（千賀）、新よしはらのだん（口 倉、切 土佐、奥 かけ合 氏・筆・千賀・倉・律）、常悦やしきのだん（口 筆、切 中、跡 千賀）、かたきうちのだん（律、三保）、紺屋のだん（口 氏、切 八重）。 ※角書「姉は宮城野／妹はしのぶ」。 ※初日と千種楽は『伊勢歌舞伎年代記』に拠る。	うぢの常悦（音五郎）、今江兵五郎（金吾）、志賀団七（冠四）、百しやう与も作（元五郎）、しのぶ（重五郎）、七郎兵へ（三吾）、おさよ（重三郎）、とぜう（佐造）、大ふくや惣六（音五郎）、勘九郎（冠作）、丸ばし秋夜（金吾）、宮きの（三吾）。
一八一二	文化9	6/5~	伊勢 松坂愛宕町芝居	碁太平記白石噺	発端（仮名）、明神ノ森之段（三保）、田植之段（口 倉、切 氏）、逆井村之段（口 八重、中 土佐、切 中）、浅草之段（千賀）、新吉原之段（口 律、切 土佐）。 ※角書「姉は宮城野／妹はしのぶ」。	常悦（音五郎）、谷五郎（弥三郎）、たん七（与十郎）、与茂さく（元五郎）、おのぶ（重五郎）、七郎兵へ（三吾）、おさよ（重三郎）、としやう（左造）、宗六（音五郎）、勘九郎（冠作）、秋夜（元五郎）、宮きの（金吾）。
一八一二	文化9	12/10~	堺 宿院芝居	白石ばなし	七つ目（灘）。	しのぶ（竹吉）、宗六（大五郎）、宮ぎの（虎造）。
一八一三	文化10	2/23~	京 和泉式部境内 芝居	碁太平記白石噺	発端（元）、明神の森（律）、楠原屋敷の段（口 加、中 式、切 氏）、田うゑのだん（口 三保、奥 八重）、逆井村のだん（口 絹、中 土佐、切 中）、あさくさの段（絹）、新吉原の段（口 律、切 土佐、かけ合 政・氏・絹・律・三保・式・加）、常悦屋敷の段（口 氏、切 八重）、かたきうち（かけ合 加・元・百合）。	常悦（九幸）、谷五郎（冠三）、団七（千二郎）、与茂作（彦三）、おのぶ（重五郎）、七郎兵衛（千四）、おさよ（重三郎）、どぜう（弥三郎）、宗六（九幸）、冠九郎（新二）、丸橋忠弥（千四）、宮ぎの（辰造）。
一八一五	文化12	3/16~	いなり境内	碁太平記白石噺 大序より 七つ目まで	発端（定）、明神の森の段（十七）、やしきのだん（口 琴、次 式、切 要）、田うへの段（口 菊、おく 染）、逆井村の段（口 筆、中 重、切 中）、浅草のたん（口 式、おく 要）、新よしはらのだん（口 倉、切 筆）。 ※角書「姉は宮城野／妹はしのぶ」。 ※語り「北朝のぐんせい揃へは花やか成けるお姫さまの下知のさいはいふれやふる／やき姿の奴が大望にこへにきはしくも諷ふしづの女の田うへうたは揃ひも揃ひし孝心の敵うち／南朝のぐんぜい揃へは見事なりけるくかいの大よせ色も香も有山吹ながしの旗の紋に四海をなびかす工夫に渡るしづの男の惣大将はちかひにちかひし神木のしなへ打」。	兵部之介（与十郎）、谷五郎（兵吉）、しがたん七（元五郎）、与茂作（佐造）、おのぶ（東十郎）、七郎介（冠四）、おさよ（勢蔵）、宗六（冠四）、冠九郎（小六）、宮ぎの（国八）。
一八一五	文化12	8/23~	座磨社内	碁太平記白石噺 序より 七つ目迄	大序（富）、明神の森の段（三保）、屋敷の段（口 富、中 入、切 むら）、田うへのだん（口 富、おく 佐賀）、逆井村の段（口 入、切 八重）、浅くさのだん（入）、新よしわらのだん（口 三保、切 土佐）。 ※角書「姉は宮城野／妹はしのぶ」。	宇治常悦（才治）、谷五郎（千治郎）、志賀団七（千治郎）、与茂作（音右衛門）、おのぶ（重五郎）、七郎兵衛（千四）、おさよ（重三郎）、宗六（九孝）、冠九郎（千治郎）、宮ぎの（辰造）。

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
一八一八	文政1	6/6~	京 因幡薬師芝居	碁太平記白石噺 大序より 七つ目迄	大序(宮木)、二段目(千賀)、三段目(口 梶、切 鐘)、四段目(染)、五段目(口 富、切 宮戸)、六段目(島)、七段目(口 千賀、切 土佐)。	宇治常悦(与十郎)、かなへ谷五郎(才治)、志賀団七(弥三郎)、与茂さく(鬼市)、しのぶ(重五郎)、庄屋七郎兵へ(冠四)、おさよ(林三郎)、どせう(与十郎)、ていしゆ宗六(文五郎)、冠九郎(金四)、宮城の(新吾)。
一八一九	文政2	1/14~	いなり社内	碁太平記白石噺 大序より 七つ目迄	発端(島)、明神の森の段(吾)、普伝やかたの段(口 富、切 むら)、田植の段(口 梶、おく 染)、逆井村の段(口 むら、切 土佐、中)、浅草の段(吾)、新よしわらの段(口 富、切 土佐)。 ※角書「姉は宮城野/妹はしのぶ」。 ※語り「北朝の軍ぜい揃へば花やか成けるお姫さまの下知のさいはいふれやふる/やき姿の奴が大望にこへにぎはしくも諷ふ賤の女の田うへうたは揃ひも揃し孝心の敵うち/南朝の軍ぜい揃へは見事成ける廓の大よせ色も香も有山吹ながしの旗の紋に四海をなびかす工夫に渡る賤の男の惣大将誓にちかひし神木のしなへうち」。	常悦(冠三)、谷五郎(兵吉)、団七(新二)、与茂作(冠三)、しのぶ(重五郎)、七郎兵へ(千四)、おさよ(東十郎)、どじやう(徳蔵)、宗六(九孝)、貫九郎(新二)、宮ぎの(辰五郎)。
一八一九	文政2	閏4/8~	江戸 結 城 座	碁太平記白石噺 十一段	序(家)、弍(若)、参(口 千賀、中 律、切 絹)、四(口 宮、切 氏)、五(口 島、切 下り 時)、六(若)、七(口 絹、切 氏、奥 惣カケ合)、八(口 律、切 若)、九(千賀)、十(口 島、切 下り 時)。 ※角書「姉は宮城野/妹はしのぶ」。 ※語り「武名に功を立たる男は六十余州を岡目八もくはねかけるいもせの中手は恋に目をもつ一間飛北朝にいたる南朝の勢/親への孝を立たる女は五十四郡にたつた一もく打とるかたきの奥の手だかれて寝ばまの睦言はしてうにかゝる五丁町の賑」。	宇次の常悦(伊三郎)、金井谷五郎(東作)、志賀団七(伊三郎)、百姓よも作(冠十)、妹しのぶ(新七)、庄や七郎兵衛(伊三郎)、与茂作女房(伝七)、どじやう(力蔵)、大黒や惣六(伊三郎)、勘九郎(冠十)、鞠がせしや(貫十郎)、けいせい宮ぎの(伝七)。
一八二〇	文政3	10/1~	御 霊 社 内	碁太平記白石噺 大序より 七冊目まで	明神の森の段(祖)、屋舗の段(口 君、中 綾、切 巴)、田うへの段(口 菅、おく 君)、逆井村の段(口 雛、中 八重、切 咲)、浅草の段(綾)、新吉原の段(口 勝、切 筆)。 ※角書「あねは宮ぎの/いもとはしのぶ」。	常悦(源十郎)、谷五郎(金四)、団七(田吉)、与茂作(勢造)、おのぶ(久吉)、七郎兵へ(与十郎)、はゝおさよ(重三郎)、どじやうの江戸兵へ(田吉)、宗六(金吾)、冠九郎(源十郎)、宮ぎの(国八)。
一八二一	文政4	11/13~	道頓堀角丸芝居	碁太平記白石噺	浅草の段(富)、新吉原の段(口 勝、切 播磨大掾)。	おのぶ(重五郎)、どじやう(進四)、宗六(才治)、貫九郎(金四)、宮ぎの(国八)。
一八二三	文政6	5	伊勢 いせ中の地蔵 大芝居	碁太平記白石噺 大序より 七つ目迄	明神森の段(口 桜、奥 梶)、田植の段(口 桑、おく 染)、逆井村の段(口 百合、中 播磨大掾、奥 梶)、浅草の段(長門)、新吉原の段(口 民、ラク 播磨大掾)。 ※角書「姉は宮城野/妹は信夫」。	宇治常悦(左蔵)、金井鉄五郎(千四)、しな台七(千助)、百性と茂作(源吾)、おのぶ(三吾)、庄屋七郎兵へ(文三郎)、与茂作女房(林三郎)、どじやう(辰蔵)、大福や宗六(文三郎)、冠九郎(左蔵)、宮城野(辰五郎)。
一八二三	文政6	10/5~	江戸 結 城 座	碁太平記白石噺 七つ目迄	※2枚番付の1枚目か。	(不明)

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
一八二五	文政8	5/7~	御 霊 境 内	碁太平記白石噺 大序より 七つ目まで	明神森の段（浜）、屋敷の段（口 宮子、中 和佐、切 生駒）、田う 象の段（口 浜、おく 吾）、逆井むらの段（口 頼、中 君、切 巴）、浅草の段（房事 岡）、新よしわらの段（口 頼、切 若）。 ※角書「姉は宮ぎの／妹はしのぶ」。 ※語り「北朝の軍勢揃へは花やか成けるお姫さまの下知のさいはいふ れやふる／＼やさ姿奴が大望二声にきはしきも諷ふしづの女の田うへ 歌は揃ひも揃ひし孝心の敵討／南朝の軍勢揃へは見事成けるくるはの 大よせ色も香も有山吹なかし旗の紋二四海をなびかず工夫二渡る賤 の男の惣大将は誓ひ二誓ひし神木のしなへ打」。	兵部之助（東十郎）、金江谷五郎（金四）、志 賀団七（新治）、百性与茂作（源吾）、娘しの ぶ（東十郎）、庄屋七郎兵へ（金吾）、母おさ よ（勢造）、手づまどじやう（源吾）、宗六 （金四）、冠九郎（新治）、宮ぎの（国八）。	
一八二六	文政9	8/23~	高津境内稽古 場	碁太平記白石噺 大序より 七つ目まで	発端（美和）、明神の森の段（かけ合 高・萩）、田うへのたん（口 友、おく 泉）、逆井村の段（口 音羽、切 町）、新よしはらの段 （口 泉、切 源）。 ※角書「姉は宮ぎの／妹はしのぶ」。	宇治常悦（小六）、金江谷五郎（東十郎）、志 賀団七（東十郎）、与茂作（伊平）、しのぶ （勢造）、庄屋七郎兵へ（新吾）、与茂作女房 （源三郎）、大福や宗六（新吾）、宮ぎの（小 六）。	
一八二六	文政9	10/5~	名古屋 若 宮 芝 居	碁太平記白石噺	明神森の段（勝）、田うへの段（口 巴、おく 富）、逆井村の段（口 和佐、切 生駒）、浅草の段（和佐）、新吉原の段（口 元、切 若）。 ※角書「姉は宮ぎの／妹はしのぶ」。 ※『小寺玉晁記録』は10月15日とする。	常悦（金四）、谷五郎（新治）、だん七（新 治）、与茂作（朝之助）、しのぶ（東三郎）、 七郎兵衛（金吾）、おさよ（勘造）、どぜう （重造）、宗六（金四）、官九郎（新治）、宮 ぎの（伝七）。	
一八二七	文政10	8/26~	御 霊 境 内	碁太平記白石噺 大序より 七つ目まで	大序（口 楨、次 元）、明神の森のたん（広）、やしきの段（口 桑、中 久、切 綾）、田うへの段（口 半、おく 生駒）、逆井村の だん（口 三根、切 此、若）、浅草の段（生駒）、新よし原の段 （口 久、切 播磨大掾、跡 かけ合 元・佐代・十九）。 ※角書「姉は宮城野／妹はしのぶ」。	宇治兵部之介（金吾）、谷五郎（東十郎）、志 賀台七（新四）、与茂作（源吾）、しのぶ（新 吾）、庄官七郎兵へ（新吾）、おさよ（勢 造）、宗六（金四）、冠九郎（朝右衛門）、宮 ぎの（国八）。	
一八二八	文政11	2/16~	江戸 土 佐 座	白 石 噺	逆むらの段（口 三輪、御目見へ出語り 切 下り 升=清糸）。	常悦（冠二）、谷五郎（新七）、台七（一 山）、おのぶ（弥十郎）、七郎兵衛（伊三 郎）、おさよ（弥左衛門）。	
△	一八二八	文政11	後半	江戸 土 佐 座	（碁太平記白石 噺 七つ目まで）	大序（元）、明神の森の段（生駒）、田植の段（口 式、ヲク 綾）、逆井むらの段（口 三輪、中 中、切 島）、浅草奥山の段（三 輪）、新よし原の段（口 菅、切 若）、奥座しきの段（中、カケ合 綾・三輪・菅・式・元・国・記）。 ※角書「姉は宮き野／妹はしのぶ」。 ※神津武男「竹本撰津大掾旧蔵人形浄瑠璃番付集について—成立と伝 来、および細目の紹介—」（『国文学研究資料館紀要』第29号）に拠 る。	常悦（源十郎）、金江谷五郎（新七）、志賀台 七（東九郎）、よも作（兼吉）、おのぶ（万治 郎）、庄屋七郎兵衛（冠二）、おきよ（弥左衛 門）、どぜう（一山）、惣六（兵吉）、くわん 九郎（東九郎）、しうや（兼吉）、傾城みやきの （伊三郎）。
一八二九	文政12	11/27~	いなり境内	碁太平記白石噺 大序より 七つ目まで	明神の森の段（口 琴、次 年、おく 楽）、屋敷の段（口 梅、お く ひな、切 岡）、田植の段（口 八木、おく 久）、逆井村の段 （口 よど、切 音）、浅草の段（岡）、新吉原の段（口 音羽、切 高麗）。 ※角書「姉は宮ぎの／妹はしのぶ」。	兵部之助（辰造）、谷五郎（岩五郎）、志賀団 七（辰助）、与茂作（三左衛門）、妹しのぶ （辰造）、七郎兵へ（与十）、おさよ（三左衛 門）、品玉どじやう（辰助）、大福や宗六（才 治）、岡九郎（与十）、けいせい宮ぎの（辰五 郎）。	

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
一八三〇	文政13	2/18~	御 霊 境 内	碁太平記白石噺	新吉原揚屋のだん（口 富士、切 要事 村）。	妹しのぶ（鬼市）、大ふくや宗六（千四）、けいせい宮ぎの（新吾）。
△ 一八三二	天保3	8/25	江戸 品川本宿川熊	（白 石 噺）	四ツ目（実）。 ※『染太夫一代記』に拠る。	
一八三二	天保3	11/20~	名古屋 清寿院芝居	白 石 噺	七つ目。 ※素人浄瑠璃に人形を加えた興行。	おのぶ（吉造）、惣六（佐造）、宮城の（朝七）。
一八三三	天保4	3/15~	いなり境内	碁太平記白石噺	浅草寺の段（口 島）、新よし原の段（中 音羽、切 住）。 ※角書「姉は宮ぎの／妹はしのぶ」。 ※「三月十七日より」とする同処・同外題の別番付あり。	妹しのぶ（小辰）、どじやう（新五郎）、宗六（金四）、貴九郎（岩五郎）、姉宮ぎの（辰五良）。
一八三四	天保5	5/13~	名古屋 清寿院芝居	白 石 噺	揚やのだん（口 さと、切 住=兵吉）。	おのぶ（千四）、亭主宗六（新治）、宮ぎの（三吾）。
一八三四	天保5	11/11~	座 摩 境 内	碁太平記白石噺	浅草のだん（巴磨）、よし原揚屋の段（口 さと、切 鞆）。	妹しのぶ（辰造）、ていしゆ宗六（千四）、けいせい宮ぎの（国八）。
一八三五	天保6	7	京 誓願寺芝居	碁太平記白石噺	新よし原あけやの段（口 寿、切 住）。 ※建狂言「祇園祭礼信仰記」の付け物のひとつ。付け物を別狂言に差し替えた番付もあり。	しのぶ（清七）、宗口六口（金四）、宮ぎの（辰五郎）。
一八三六	天保7	5	名古屋 若宮御社内	碁太平記白石噺	揚屋の段（口 当能、切 鞆）。	しのぶ（徳次郎）、宗六（千四）、宮城野（虎造）。
一八四一	天保12	6	京 四条道場芝居	碁太平記白石噺	新吉原のだん（口 錦、切 茂=伊八）。 ※建狂言「三日太平記」の付け物のひとつ。付け物を別狂言に差し替えた番付もあり。	しのぶ（辰造）、宗六（徳造）、宮城の（辰五郎）。
一八四三	天保14	4/2~	北堀江市之側 芝居	碁太平記白石噺	明神ノ森の段（喜代、楠正成／山名軍太夫／金江谷五郎 吉田金四／右三やく出づかひ二而相つとめ申候）、田植のだん（口 要、おく 越）、新吉原の段（口 恵見、切 氏=広助）、奥ざしきのだん（カケ合 勇・要・得・紅梅・広）、常悦屋敷の段（口 喜代、切 岡）、敵討の段（得・市・柏・木曾）。	宇治常悦（徳蔵）、志賀だん七・鶴ノ羽黒右衛門（金四）、百姓与茂作（源吾）、妹しのぶ（辰造）、庄や七郎兵へ（重五郎）、大ふくや宗六（金四）、まりヶ瀬秋夜（喜十郎）、宮城野（辰五郎）。
一八四三	天保14	7/3	宮 島	白 石	（口 早、春）。 ※掲出の番付は出演者名のみ版にし、外題役名を墨で書き入れる巡業専用のものである。そのため太夫・人形遣いに担当の役場役名を欠くものがある。	しのぶ（辰造）、惣六（喜十郎）、口城の（辰玉）。
△ 一八四四	天保15	4/4	阿波 観 音 寺 村	（白 石 噺）	七。 ※『元木家記録』に拠る。	
一八四四	天保15	9	道頓堀東竹田 芝居	碁太平記白石噺	田うへのだん（口 巴枝、おく 春）、逆井村の段（口 大登、切 大住）、浅草のだん（島）、新吉原の段（口 多賀、切 鞆）、奥ざしきのだん（かけ合 和・大見）。 ※人形役名と人形遣い名の対応関係には不明確な所がある。	常悦（喜十郎）、谷五郎（冠四）、団七（喜十郎）、妹おのぶ（清十郎）、七郎兵へ（門蔵）、与茂さく女房（重太郎）、品玉師どじやう（徳十）、宗六（文三）、寛九（福之助）、宮ぎの（辰造）。

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
一八四四	天保15	10	京 四条南側大芝居	碁太平記白石噺	新吉原之だん（口 是、切 氏）。	しのぶ（冠三）、亭主宗六（金四）、宮木の（国八）。	
一八四五	弘化2	4/2～	四ツ橋南へ入 浜	白 石 噺	七（弘）。 ※「みどり浄るり番組」の内。		
一八四六	弘化3	5/9～	京 左女牛北側芝居	白 石 噺	五つめ（むら）。		
△	一八四七	弘化4	11/15	江戸 茅場町高松亭	（白 石 噺）	七（梶当＝房治郎）。 ※『染太夫一代記』に拠る。	
一八四九	嘉永2	3/7～	名古屋 若宮御社内	白 石 噺	茶屋場（八尾）。 ※「子供浄瑠璃」の内。		
一八四九	嘉永2	閏4/8～	京 左女牛北側芝居	白 石 噺	四（佐ト）。 ※素浄瑠璃興行。		
△	一八五〇	嘉永3	夏頃	播州 網 干	（太平記白石 噺）	七（小乃）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△	一八五〇	嘉永3	夏頃～ 9/14	西横堀鰻谷	（白 石 噺）	吉原（小乃）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
一八五〇	嘉永3	8/15～	文 楽 小 家	白 石 噺	七つ目（津島＝楠六）。 ※「みどり浄瑠璃」の内。		
△	一八五〇	嘉永3	10末頃	丹波 和智市場村	（白 石 噺）	（木崎）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
一八五〇	嘉永3	12	兵庫 兵庫定芝居	白 石 噺	吉原之段（切 むら）。 ※「みどり浄瑠璃」の内。 ※「白石噺吉原之段」は番付欄外に記す。		
△	一八五一	嘉永4	7頃	江戸 根 津	（白 石）	七つ目（登乃＝吉弥）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△	一八五一	嘉永4	7頃	江戸 さ や 丁	（白 石 噺）	吉原（登の）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
一八五一	嘉永4	8/1～	清 水 町 浜	白 石 は な し	田うへ（梶さ＝清吾）。		
一八五二	嘉永5	1	清水町浜小家	白 石 後 日 誉 新浄るり	逆井村のだん（口 田喜、切 咲）。 ※語り「姉は長刀の名人全盛の宮城野／妹は鎖鎌の達人田舎のしのぶ」。		
一八五二	嘉永5	閏2/6～	京 四 条 道 場	白 石 噺	新吉原（小鞆）。 ※「かけゑ」浄瑠璃興行。		
△	一八五二	嘉永5	4/11	相州 浦賀西渡し場	（白 石）	七。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△	一八五二	嘉永5	4/22	紀州 大 島	（白 石）	七つ（登の）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△	一八五二	嘉永5	5/13	上町鍵屋町大 ろうじ席	（白 石 噺）	吉原（登の＝福造）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一八五二	嘉永5	5/21	上町鍵屋町大 ろうじ席	(白 石) ※『弥太夫日記』に拠る。	
△	一八五二	嘉永5	9/15カ	法 善 寺	(白 石 噺) 吉原(小鞆=清六)。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
	一八五三	嘉永6	6	摂州 津国高槻芝居	碁太平記白石噺 大序より 七ツ目迄	明神の森(橘)、田植の段(菊)、迷井村(口 橘、切 組)、吉原茶 屋場(カケ合 園・組・三尾)。 宇治常悦(鶴吉)、金井谷五良(安吉)、志賀 代七(千代松)、百姓与茂作(時松)、前おの ふ(梅野)、後おのふ(安吉)、庄屋七良兵衛 (時松)、女房おさよ(小八重)、亭主宗六 (千代松)、城順宮城野(鶴吉)。
△	一八五三	嘉永6	11/23	播州 明石平松山	(白 石) (登の)。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
	一八五四	嘉永7	1/2~	道頓堀法善寺 境内	白 石 噺 七つ目(津磨=徳造)。	
	一八五四	嘉永7	3/27~	道頓堀法善寺 境内	白 石 噺 五段目(口 秀)。茶屋場(口 津磨、切 小鞆)。	
	一八五四	嘉永7	5	新築地清水町 浜小家	碁太平記白石噺 七つ目	田植のたん(口 和国、おく 弥、跡 当勢)、逆井村のたん(中 佐 賀、切 田組)、浅草のたん(田喜)、新吉原揚屋の段(中 多賀、切 巴)。 ※角書「姉は宮城野/妹は志のぶ」。 ※6月14日夜大地震のため、同日で興行打切り。
	一八五四	嘉永7	10	京 因幡薬師境内	碁太平記白石噺 七つ目	新吉原のたん(口 鳶=音五郎、切 浪=駒造)。 ※番付に「あやつり仕立竹田からくり」とあるが、出演者名などから 普通の竹田からくり興行とは考えがたい。よって人形浄瑠璃の興行と みなした(『義太夫年表 近世篇』)。
	一八五五	安政2	2/2~	京 寺町とら薬師 寺内	白 石 噺 五(美尾=音五郎)。 ※「かけ絵」浄瑠璃興行。	
	一八五五	安政2	8/24~	京 四条北側芝居	白 石 七(浪=音五郎)。	
	一八五六	安政3	10/17~	名古屋 若宮御社内	碁太平記白石噺 大序より 七ツ目迄	大序(蔵)、明神の森段(今)、田植のたん(豊)、逆井村のたん (口 蔵、切 佐賀)、新吉原のたん(口 豊、切 東)。 ※角書「姉は宮城の/妹はしのぶ」。 宇治兵部之介(源吾)、志賀谷五郎(与吉)、 志賀団七(伝吉)、百姓与茂作(新七)、おの ぶ(清十郎)、七郎兵衛(巳之助)、大黒屋宗 六(与吉)、鞠ヶ瀬秋夜(与吉)、けいせい宮 ぎの(源吾)。
	一八五七	安政4	3	法善寺浄るり 席	白 石 噺 後 日 七郎兵へ内(錦)。	
	一八五七	安政4	11/1~	いなり社内東	碁太平記白石噺 大序より 七ツ目迄	祈のたん(友、千鳥、喜志)、石堂館之たん(口 曾根、中 理、切 当 久)、明神ノ森のたん(弥)、田植のたん(口 当勢、おく むら)、 逆井村のたん(中 佐賀、切 湊)、浅草門前の段(口 和国、おく 当 久)、新吉原揚屋のたん(中 理、切 春)。 ※角書「姉は全盛の宮城野/妹は新造のしのぶ」。

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
一八五八	安政5	3/3~	京 四条南側大芝居	新 吉 原	茶や場ノ段（定=嘉吉）。	
△	一八五八	安政5	10/26	紀州 小 島	(白 石) 七（伏見）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△	一八五八	安政5	11/7	紀州 和歌山北の町	(白 七) （伏見）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△	一八五八	安政5	11/11	紀州 西大井村	(白 石) 七（伏見）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△	一八五八	安政5	11/17	紀州 上三毛村	(白 石 噺) 七（伏見）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△	一八五八	安政5	11/18	紀州 直 川	(白 石 噺) 七つ目（伏見）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△	一八五八	安政5	11/20	紀州 広 西	(白 石 噺) 吉原（伏見）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△	一八五八	安政5	11/23	紀州 和歌山北の町	(白 石 噺) （伏見）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△	一八五八	安政5	11/晦日	紀州 和歌山北の町	(白 石) 七（伏見）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
	一八五九	安政6	1	京 四条南側大芝居	白 石 後 日 噺	七郎兵へ内ノ段（錦=広兵衛）。
△	一八五九	安政6	3/11	泉州 深 日	(碁太平記白石 噺)	(伏見)。 ※『弥太夫日記』に拠る。
△	一八五九	安政6	9/5	紀州 道成寺門前小家	(白 石 噺)	七（南部）。 ※『弥太夫日記』に拠る。
△	一八五九	安政6	9/22	紀州 田 辺 本 町	(白 石)	七つ目（南部）。 ※『弥太夫日記』に拠る。
△	一八五九	安政6	10/6	紀州 湯浅倉町真楽寺	(白 石 噺)	七つ目（南部）。 ※『弥太夫日記』に拠る。
△	一八五九	安政6	10/13	紀州 日 市	(白石はなし)	七（南部）。 ※『弥太夫日記』に拠る。
△	一八六〇	安政7	1/2~	道頓堀法善寺 小家	白 石 噺	新吉原（筆尾=鶴助）。 ※『近世邦楽年表 義太夫節之部』及び東京藝術大学附属図書館蔵 「近世邦楽年表基本カード」に拠る。
	一八六〇	万延1	7	あみた池寺内	碁太平記白石噺 七つ目	新よし原のだん（口 長子、切 久、跡 大浜）。 しのふ（辰治）、宗六（新五郎）、宮きの（兵花）。
	一八六一	万延2	2	京 四条北側大芝居	碁太平白石噺	新吉原の段（口 鶴尾、切 伊達）。 ※石割松太郎『近世邦楽年表 義太夫節之部』書入れに「△正月廿八日 四条北側（別番付）」とあるが、この興行と同じものか。 しのぶ（文三）、大福や宗六（清七）、けいせい宮木の（金四）。

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
一八六一	文久1	11	道頓堀竹田芝居	碁太平記白石噺七冊目	新吉原の段（口 鶴尾、切 伊達）。	妹しのぶ（門治）、宗六（門蔵）、宮ぎの（兵花）。
一八六一 ～ 一八六二	文久1 ～ 文久2	11～3	宮島カ	新吉原段	（内匠）。 ※掲出の番付は出演者名と口上のみを版にし、外題を墨で書き入れた巡業専用のもの。	
一八六三	文久3	2	京 四条南側大芝居	碁太平記白石噺	逆井村ノだん（宝、浜）、新吉原の段（口 園、切 生駒）。	宇治常悦（門十郎）、金井谷五郎（文三）、志賀団七（冠三郎改 友造）、しのぶ（辰十郎）、庄や七郎兵へ（門蔵）、おさよ（小玉）、宗六（門十郎）、宮木の（門蔵）。
一八六三	文久3	3	道頓堀若太夫芝居	碁太平記白石噺	新吉原の段（口 谷、切 生駒）。 ※「口」を「豊竹勝太夫」とする別番付あり。	しのぶ（辰十郎）、宗六（門十郎）、宮ぎの（門蔵）。
一八六四	元治1	8/22～	いなり東小家	碁太平記白石噺大序より七段目迄	大序 祈の段（鶴、登戸、喜野、田美、左馬、理久）、石堂やかたのた ん（常、竜、岩戸、二見、奥 佐賀）、明神ノ森の段（切 カケ合 筑 前・住）、田植のだん（口 和、奥 弥）、逆井村の段（中 長枝、切 咲）、浅草門前ノ段（口 実、奥 多満）、新吉原の段（中 佐賀、切 湊）。 ※角書「姉は全盛の宮ぎのノ妹は新造のしのぶ」。 ※番付の日付は「八月吉日より」であるが、番付の1本に「来ル廿二日 より」と書込みがあり、祐田善雄『近世邦楽年表 義太夫節之部』書 入れに「二十二日より（南木氏番付）」とあるので改めた。しかし 『浄瑠璃大系図』は1日とも28日とも記す。『弥太夫日記』の8月24日 の条の記述によると、19日初日ともとれる（『義太夫年表 近世 篇』）。	宇治常悦（喜十郎）、金江谷五郎（玉造）、志賀台七（玉造）、与も作（才治）、妹しのぶ（玉三郎）、庄や七郎兵へ（新五郎）、与も作女房（筆之丞）、豆のどじやう（小兵吉）、大福や宗六（才治）、観九郎（新五郎）、けいせい宮ぎの（松江）。
一八六四	元治1	9	御 霊 裏 門	碁太平記白石噺	新よし原の段（巴津、伊達）。	しのぶ（小玉）、切 しのぶ（兵吉）、そうろく（門蔵）、みやきの（辰造）。
一八六四	元治1	12/3～	京 四条北側大芝居	白 石 噺	逆井村ノ段（咲＝豊吉改 伝吉）。	
一八六五	元治2	3/23～	京 四条道場北ノ 小家	白 石 噺	田植ノ段（有馬＝伝吾）。新吉原（宮戸＝兵吉）。	
一八六五	慶応1	8/11～	京 四条道場北ノ 小家	碁太平記白石噺	田植の段（浜＝亀助）、新吉原の段（口 春戸＝鶴太郎、切 春＝吉兵衛）、新作後日晝 逆井村七郎兵衛内ノ段（口 津賀子＝庄之助、切 咲＝伝吉）。	
一八六五	慶応1	9/9～	京 伏見ほうき町 芝居	白 石 噺	七つ目（宮戸＝兵吉）。	
一八六六	慶応2	6/18～	京 四条北側大芝居	白 石 噺	田植之段（蔦＝常吉）。	
一八六七	慶応3	5上旬～	名古屋 若宮御境内	白 石 噺	揚屋のだん（泉＝才二）。	おのぶ（金三郎）、大黒や惣六（小市）、けいせい宮城の（門蔵）。

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
一八六七	慶応3	6中旬～	名古屋 清寿院御境内	白石噺	逆井村のたん（鳴勢）。	宇治常悦（柳助）、志賀団七（専右衛門）、百性 与茂作（才九）、娘おのぶ（清治）、庄屋七 郎兵へ（清七）。
一八六七	慶応3	7/23～	京 四条道場北ノ 小家	白石噺	田植ノ段（宝＝弥子）。	
一八六七	慶応3	12/8～	京 四条北側芝居	白石	田植ノ段（春栄＝小兵）。	
一八六八	明治1	9/27～	いなり社内東 芝居	碁太平記白石噺 大序より 七冊目迄	大序 志貴毘沙門堂のたん（豊、旭、稲、七、咲馬）、石堂館のたん （口 咲代、中 左馬、次 磯、切 音羽、中）、明神の森の段（中 染 子、切 巴）、田植のたん（口 春戸、奥 実、跡 理久）、逆井村の段 （中 中、切 湊）、浅草のたん（口 常、奥 音羽）、新吉原の段（中 和、切 咲）。 ※角書「姉は全盛の宮城野ノ妹は新造のしのぶ」。	宇治常悦（喜十郎）、金谷谷五郎（玉造）、志 賀台七（玉之助）、与茂作（小玉）、妹しのぶ （辰十郎）、庄や七郎兵へ（辰造）、豆のどじ やう（小玉）、大福や宗六（喜十郎）、官九郎 （辰之助）、丸橋忠弥（勢造）、娘宮きの（辰 造）。
一八六八	明治1	12/6～	京 四条北側芝居	白石噺	新吉原（津＝小兵）。	
一八六九	明治2	9/9～	京都 道場北ノ小家	白石噺	新吉原ノ段（中 小賀＝小時、切 大住＝才治）。 ※素浄瑠璃。	
一八七〇	明治3	3/3～	京都 道場北ノ小家	白石噺	田植ノ段（友＝直吉）。逆井村之段（浜＝庄次郎）。	
一八七〇	明治3	10/2～	京都 和泉式部北向 芝居	（碁太平記白石 噺）	新吉原揚屋之段（茂＝時造）。	しのぶ（当見）、宗六（小陣）、宮ぎの（多 喜）。
一八七一	明治4	3	京都 北側大芝居	（碁太平記白石 噺）	新吉原あげや（茂＝時造）。 ※典拠とした番付には興行年次に関する記載が見当たらない。『中西 仁智雄コレクション 浄瑠璃番付写真集』には明治5年とあるが、『義 太夫年表 明治篇』欄外記事、八世竹本綱太夫『でんでん虫』に従 い、明治4年とした。	
一八七二	明治5	3	天神芝居跡新 席	白石噺	新吉原の段（文字）。	
一八七二	明治5	4/8～	京都 北側大芝居	白石噺	新吉原（津＝小兵）。 ※素浄瑠璃。	
一八七二	明治5	5/21～	松嶋文楽座	碁太平記白石噺 大序より つゞき七冊	大序 祈念のたん（う、桂、浪の、鞆登、梶登、鞆栄、梶代、春馬、亀 久）、石堂館のたん（口 園、次 三根、切 中）、明神の森の段（中 豊、切 かけ合 実・梶）、田うへのたん（口 園、奥 浪）、逆井村の たん（中 弥、切 実、切 染）、浅草門前の段（口 豊、奥 梶）、新吉 原の段（中 町、切 越路）。 ※角書「姉は全盛の宮城野ノ妹は田舎のしのぶ」。	宇治常悦（玉造）、金江善五郎（光造）、志 賀台蔵（玉治）、与茂作（辰五郎）、妹しのぶ （玉助）、庄や七郎兵へ（喜十郎）、与茂さく 女房（鹿造）、土じやう（清七）、大ふくや宗 六（喜十郎）、冠九郎（玉之介）、宮城野（辰 造）。

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
一八七四	明治7	10	堀江芝居	碁太平記白石噺	明神森の段(嶋)、田植の段(文字)、逆井むらの段(口春戸、切浜)、浅草の段(口鞠登、奥山四郎)、新吉原の段(口春子、切織)。 ※角書「姉は全盛位/妹は新造」。	宇治常悦(門造)、金井谷五郎(光造)、志賀団七(兵三)、百しやう与茂作(勢造)、むすめおのぶ(辰太郎)、七郎兵衛(喜十郎)、女房おさよ(東十郎)、どじやう(門造)、大黒や宗六(喜十郎)、官九郎(玉枝)、けいせい宮ぎの(東十郎)。
一八七四	明治7	11/1~14	名古屋末広座	白石噺	七ツ目(淀)。 ※浄瑠璃身振り。初日・千穂楽は『勾欄類見聞』に拠る。	
一八七五	明治8	7	名古屋橘座	白石噺	七ツ目(十三=広勝)。 ※太夫 豊竹古鞠太夫。	
一八七五	明治8	11	竹田芝居	白石噺	田植(小重=小仙)。 ※素浄瑠璃。	
一八七六	明治9	1/1~	天満大工町芝居	白石噺	七(田子)。逆井村(浜)。 ※「浄瑠璃緑りの鉢植」の内。	
一八七六	明治9	5	元長州屋敷小家	碁太平記白石噺全五冊	大序(光、篤の、悦)、明神森之段(勇、小賀)、田植之段(田右、織の)、逆井村之段(浜尾、文字)、浅草之段(小賀)、新吉原之段(十九、茂)。 ※浄瑠璃身振。	
一八七六	明治9	6	松嶋文楽座	碁太平記白石噺大序よりつゞき七冊	大序 祈の段(芳、登勢、氏栄、梶栄、越代)、由比ヶ浜の段(栄、越の)、足利やかたの段(中袖、切中、切実)、明神の森の段(口田喜、切正雪一津・谷五郎一氏)、田植の段(口越の、奥組)、逆井村の段(中むら、切弥、切梶)、浅草の段(口路、奥三根)、新吉原の段(中南部、切住)。 ※角書「姉は全盛の宮城野/妹は田舎のしのぶ」。 ※「六月八日ヨリ廿五日間」(『義太夫年表 明治篇』)。	由比民部之介正雪(玉治)、金井谷五郎(玉助)、志賀台七(光造)、百姓与茂作(小玉)、妹おのぶ(辰吉)、妹しのぶ(玉助)、庄や七郎兵へ(玉之助)、母おさよ(東十郎)、飴売どじやう(玉治)、大ふくや宗六(玉之助)、観九郎(光造)、丸橋忠弥(小兵吉)、宮城野(門十郎)。
一八七六	明治9	11	名古屋末広座	白石噺	七ツ目(多賀)。 ※素浄瑠璃。	
一八七七	明治10	2/13~	弁天座	白石噺 (碁太平記白石噺)	二階(田手)。 逆井村(島)。新よし原(古登)。 ※故人太鼓卯之助追善「過し日の/其年月も/めぐり来て 連営手向の薫樹 礼拝三度」の内。 ※日程は番付欄外の墨書に拠る。	
一八七七	明治10	3/18~	座摩裏門新席	白石噺	新吉原の段(浜尾=豊市)。 ※浄瑠璃糸線り。	
一八七八	明治11	2	名古屋愛栄座	碁太平記白石噺	新吉原の段(茂)。 ※浄瑠璃身振りカ。	
一八七九	明治12	1/1~3	京都道場演劇	白石噺	田植(三芳=新之助)。新吉原(殿母=仙之助)。	
一八八〇	明治13	9	京都蛸薬師新席福の家	碁太平記白石噺	新吉原の段(雛=弥六)。 ※浄瑠璃身振り。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
一八八二	明治15	1	松嶋文楽座	碁太平記白石噺	明神森の段（由井正雪一染・金谷勘兵へ一津）、新吉原の段（中組、切 越路=* 団平）、敵討の段（由井正雪一路・しのぶ一谷・志賀台七一越代・柴田三郎兵へ一袖・横井道鉄一七五三・宮城野一むら、大詰人形惣出つかひにて御覧に入申候）。 ※角書「姉は宮城野ノ妹はしのぶ」。 ※「一月廿一日ヨリ三月十日迄四十六日間」（『義太夫年表 明治篇』）。 ※「団平ハ三月十六日ヨリ七日間明石出演、廿三日帰ル」（『義太夫年表 明治篇』）。	橘正雪（玉造）、金谷勘兵へ（玉助）、志賀台七（玉治）、妹しのぶ（玉助）、大ふくや惣六（玉造）、丸橋忠弥（玉之助）、宮城野（紋十郎）。
一八八四	明治17	3	彦 六 座	碁太平記白石噺 七つ目	浅草の段（口 若鞆=* 友松、奥 源）、新吉原の段（中 楠改 歳、切 住、此所惣出つかひにて御覧に入申候）。 ※角書「姉は宮城のノ妹はしのぶ」。	志賀台七（栄造）、妹おのぶ（東十郎）、どじよ（辰枝）、大黒や宗六（小辰造）、勘九郎（辰栄）、けいせい宮城の（松江）。
△ 一八八五	明治18	10/31~ 11/18	東京 猿若町壹丁目	（碁太平記白石 噺）	大序（陸路、尾上）、明神の森の段（正雪一織・谷五郎一越代）、田植の段（春栄、路）、逆井村の段（田喜、長尾）、浅草の段（競、南部）、新吉原揚屋の段（住=勝七）。 ※竹本越路太夫・吉田玉造一座。 ※演芸資料選書・5『東京の人形浄瑠璃』、『義太夫年表 明治篇』欄外記事に拠る。	（不明）
一八八六	明治19	11	松嶋文楽座	碁太平記白石噺 大序より つづき七冊	大序 祈の段（弥重子、南枝、弥福、弥千代、陸路、浜子）、志貴山雲間の段（住次、弥鳳、尾上、弥津）、足利館の段（中 梶栄、次春栄、切 路）、明神森の段（正雪一長尾・谷五郎一織）、田植の段（口 越代、奥 谷）、逆井村の段（中 多門、次 春戸、切 弥）、浅草の段（口 常子、奥 南部）、新吉原の段（中 織、切 津）。 ※角書「姉は全盛の宮城野ノ妹は新造のしのぶ」。 ※「十一月三日ヨリ卅五日間」（『義太夫年表 明治篇』）。 ※「コレラ病流行シテ出演者欠勤多ク鶴沢小庄大序ヨリ序切迄代役」（『義太夫年表 明治篇』）。	由井橘正雪（玉造）、金井谷五郎（玉七）、志賀台七（玉治）、与茂作（玉枝）、むすめしのぶ（玉之助）、庄や七郎兵へ（紋十郎）、与茂作女房さよ（玉治）、あめ売とじゆう（玉七）、大福や宗六（玉造）、観九郎（玉米）、丸はし忠弥（玉七）、けいせい宮城の（紋十郎）。
一八八七	明治20	7/1~	彦 六 座	碁太平記白石噺 吉野大内の段 より 新吉原揚や迄	吉野内裏の段（住次、源枝、鹿、組子）、生田森の段（源枝、朝）、滝川楠討死の段（切 若）、夢の段（生嶋、此所出つかひ早替りにて御覧に入候）、明神森の段（正雪一大隅・谷五郎一組=団平、此所出つかひにて御覧に入申候）、石堂館の段（中 山登、次袖、切 越、切 新鞆）、田植の段（口 七五三=* 友松、切 源）、逆井村の段（口 氏、切 組）、浅草の段（口 芳、奥 越）、新吉原の段（中 田喜、切 住、此所出つかひにて御覧に入申候）、姉妹敵討の段（若・氏・袖・山登・新鞆・源枝・住次、此所惣出つかひにて御覧に入候）。 ※角書「姉は宮城のノ妹はしのぶ」。 ※「十七日マデ十七日間」（『義太夫年表 明治篇』）。	由井正雪（辰五郎）、金井谷五郎（兵吉）、志賀台七（門造）、百姓与茂作（光造）、しのぶ（亀松）、庄や七郎兵へ（才治）、与茂作女房（東十郎）、どじやう（玉松）、大福や宗六（光造）、宮城野（辰五郎）。
△ 一八八八	明治21	1/25	京都 南側劇場	（白 石 噺）	新吉原の段（口=鶴太郎）。 ※文楽座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
一八八九	明治22	3	御霊文楽座	碁太平記白石噺	新吉原揚屋の段(中 さの、切 津)、敵討の段(宮城の一むら・志のぶ一高尾・台七一文・三郎兵へ一南枝・正雪一津和、此所惣出つかひにて御覧に入申候)。 ※「三月二十九日ヨリ四月二十一日マデ二十四日間」(『義太夫年表明治篇』)。	由比正雪(栄造)、志賀台七(金之助)、萩しのぶ(玉七)、大福や宗六(玉治)、丸橋忠弥(幸三郎)、宮城野(紋十郎)。
△	一八八九	明治22	8/10 8/14・17 8/15	京都 北側演劇場	(白石噺) 田植の段(源枝)。 田植の場(巴勢)。 新吉原の段(むら=広七)。 ※文楽座、越路一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一八八九	明治22	12/19 12/25	名古屋 千歳座	(白石噺し) (新吉原) 田植の場(津和=勝吉)。 揚屋の段(津=勝七)。 ※竹本越路太夫・豊沢広介一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一八九〇	明治23	3/23	京都 南劇場	(白石噺) 七ツ目(七五三=友松)。 ※大坂彦六座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
	一八九〇	明治23	7/1~	彦六座	碁太平記白石噺 明神森の段(谷五郎一春子・正雪一伊達)、田植の段(口朝路、奥七五三=*友松)、逆井村の段(中芳、切越=*吉三郎)、浅草の段(口春子、奥此)、新吉原の段(中生嶋、切大隅=団平、此所惣出つかひにて御覧に入申候)。	宇治正雪(兵吉)、金谷谷五郎(玉松)、志賀台七(玉米)、百しやう与茂作(宗十郎)、妹しのぶ(亀松)、庄や七郎兵へ(光造)、妻おきよ(鹿造)、どじよう(小三)、大福や宗六(兵吉)、観九郎(紋之助)、けいせい宮城の(辰五郎)。
△	一八九〇	明治23	12/6	名古屋 千歳座	(白石噺) 逆井村の段(組)。 ※竹本組太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一八九一	明治24	1/13 1/15	名古屋 末広座	(白石噺) 新吉原(路=花助)。 逆井村(小蝶=広吉)。 ※竹本越路太夫・豊沢広助一座の二ノ替り。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一八九一	明治24	1/21	京都 北座	(白石噺) 揚屋の段(路)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一八九一	明治24	8/17 8/21 8/26	京都 北座	(奥州白石噺) 吉原揚屋(路)。 坂井村(調)。 田植(調)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
	一八九二	明治25	5/15~	彦六座	碁太平記白石噺 新吉原揚屋の段(小隅、越=*吉弥、此所出つかひにて御覧に入申候)。	由井正雪(光造)、志賀台七(紋之助)、妹しのぶ(亀松)、大黒や宗六(玉松)、丸橋忠弥(亀登)、宮城野(鹿造)。

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
△	一八九二	明治25	名古屋 千歳座	(碁太平記白石噺)	(相寿=才吉)。		
				(白石噺)	新吉原の段(高尾=安次郎)。		
					新よし原(小隅=宗太郎)。 ※文楽・彦六両座合併「大阪浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。		
△	一八九二	明治25	8/13	名古屋 笑福座	(白石噺し)	田植(相寿)。 ※相生太夫・久太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一八九二	明治25	京都 北座	(白石噺)	新吉原(むら)。		
				(碁太平記白石噺)	阪井村(調)。		
				(白石噺)	田植(調)。 ※竹本越路太夫・豊沢広助・其外文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。		
△	一八九三	明治26	3/11	京都 北座	(白石噺)	揚屋(津=吉兵衛)。 ※文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一八九三	明治26	6	御霊文楽座	碁太平記白石噺 大序より 七つ目まで	大序 霊夢のだん(小さの、越江、綾免、相寿)、石堂館のだん(口谷路、津弥、中巴勢、次高尾、切路)、明神森のだん(正雪-相生・谷五郎-さの)、田植のだん(口呂勢、奥谷)、逆井村のだん(中むら、切呂)、浅草門前の段(口品尾、奥さの)、吉原揚屋の段(中相生、切津=*吉兵衛)。 ※角書「姉は全盛の宮城野/妹は田舎の志のぶ」。 ※「六月一日ヨリ六月廿三日マデ廿三(廿四)日間」(『義太夫年表明治篇』)。	宗治兵部之介正雪(玉造)、金井谷五郎(玉助)、志賀団七(玉朝)、親与茂作(玉治)、逆井村おのぶ(玉六)、娘おのぶ(玉助)、庄屋七郎兵衛(金之助)、女房おさよ(玉五郎)、豆蔵のとじう(金之助)、大黒屋宗六(玉造)、権九郎(玉朝)、丸橋忠弥(金之助)、けいせい宮城野(紋十郎)。
△	一八九三	明治26	名古屋 末広座	(白石噺)	七ツ目(むら=竹三郎)。		
				(白石噺し)	新吉原の揚屋(路=大三郎)。		
					新吉原(津=吉兵衛)。 吉原揚屋(鶴尾=吉松)。 ※竹本越路太夫・豊沢広助一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。		
△	一八九三	明治26	京都 南座	(白石噺)	揚屋(むら)。		
					田植(調)。		
					揚屋(津)。		
					逆井村(調)。 ※越路一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。		
△	一八九三	明治26	10/13	名古屋 音羽座	(白石噺し)	揚屋(橋=友之助)。 ※竹沢弥七一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
一八九三	明治26	11/5~	東京 新 声 館	碁太平記白石噺 大序より 七ツ目迄	大序（呂鳳、呂子、小幾、津摩）、明神の森の段（呂鳳、呂子）、田植の段（和佐）、逆井村の段（播尾、津賀）、吉原揚屋の段（識予、織）。 ※角書「姉は全盛の宮城野／妹は新造のしのぶ」。 ※初日と千種楽は、演芸資料選書・5『東京の人形浄瑠璃』に拠る。	宇治正雪（国八）、金井谷五郎（文吾）、代官志賀団七（文四）、百姓与茂作（文二）、娘しのぶ（国三郎）、庄屋七郎兵衛（新五郎）、与茂作女房おさよ（国五郎）、大福屋宗六（文吾）、傾城宮城野（幸吉）。	
△	一八九四	明治27	2/6	京都 南 座	（白 石 噺） 揚や（むら）。 ※越路一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。		
△	一八九四	明治27	7/18	名古屋 新 守 座	（白 石 噺） 七ツ目（むら）。 ※綾太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。		
△	一八九四	明治27	7/23	名古屋 宝 生 座	（白 石 噺） 揚屋の段（むら）。 ※綾太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。		
	一八九四	明治27	7	稲 荷 座	碁太平記白石噺 夢の段より 吉原揚屋の段迄	夢の段（弥国、伊弥、福、一、源子、弥生、朝の、いさみ）、石堂館の段（中 組栄、次 尾上、角、切 此）、明神の森の段（正雪一柳適・谷五郎一三嶋）、田植の段（口 組の、奥 伊達=*友松）、逆井村の段（中 長子、切 源、切 新靱）、浅草の段（口 いさみ、奥 生嶋、此所出遣いにて御覧に入候）、新吉原揚屋の段（口 菅、切 越=*吉弥、此所出遣いにて御覧に入申候）。	由井正雪（玉松）、金井谷五郎（玉米）、志賀団七（駒十郎）、百姓与茂作（門造）、娘おのぶ（栄三）、庄屋七郎兵衛（清十郎）、与茂作女房（三吾）、飴売どじやう（小友）、大福や宗六（玉松）、勘九郎（栄寿）、丸橋忠弥（小友）、けいせい宮城野（清十郎）。
	一八九四	明治27	9/1~	御霊文楽座	碁太平記白石噺 逆井村田植与茂作殺の段（口 殿母、奥 相生）、浅草観音門前の段（路）、新吉原揚屋の段（切 越路）。 ※「九月一日ヨリ廿三日マデ廿三日間」（『義太夫年表 明治篇』）。	由井正雪（幸三郎）、志賀団七（玉朝）、百姓与茂作（玉治）、妹しのぶ（玉助）、庄屋七郎平（亀松）、飴売どじやう（卯三郎）、大黒屋宗六（玉造）、観九郎（金之助）、けいせい宮城野（紋十郎）。	
△	一八九五	明治28	7/23 7/30	京都 南 座	（白 石 噺） 吉原（むら=竹三郎）。 揚屋（高尾=大三郎）。 ※呂太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。		
△	一八九五	明治28	8/16	名古屋 千 歳 座	（白 石 噺） 新吉原（高尾）。 ※呂太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。		
	一八九五	明治28	12/14	浪 花 座	白 石 七（春子=団吉）。 ※義太夫・稲荷座総一座。		
△	一八九六	明治29	1/24 2/7	名古屋 千 歳 座	（白石ばなし） 揚屋の場（菅=森助）。 七ツ目 新吉原（越=小団治）。 ※竹本越太夫・七五三太夫・新靱太夫・菅太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。		
△	一八九六	明治29	2/17	名古屋 千 歳 座	（白 石 噺） 揚屋（菅）。 ※竹本越太夫。前項の二の替り。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。		

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一八九六	明治29	8/1	名古屋 末広座	(碁太平記白石 噺) 新吉原揚屋の段(春子=惣太郎)。 ※大隅太夫・団平一座。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一八九六	明治29	10/1	京都 南座	(白石噺) 揚屋(春子)。 ※大隅太夫・団平一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一八九六	明治29	12/17	名古屋 千歳座	(白石噺) 新吉原揚屋(菅=森助)。 ※竹本越太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
	一八九七	明治30	1	御霊文楽座	碁太平記白石噺 浅草雷門の段(中 鶴尾)、新吉原大黒屋宮城の部屋のだん(切綾)。 ※「一月二日ヨリ三月十二日迄四十二(四十)日間」「一月十三日英照皇太后薨去ニツキ二月八日迄休ミ」(『義太夫年表 明治篇』)。	妹おのぶ(金之助)、飴売どじやう(助太郎)、大黒屋惣六(玉朝)、覬九郎(玉五郎)、けいせい宮城の(玉助)。
△	一八九七	明治30	3/4 3/8	名古屋 音羽座	(白石噺) 田植(園=大七)。 揚屋の段(綾=大七)。 ※竹本相生太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一八九七	明治30	3/15	名古屋 音羽座	(白石噺) 新吉原揚屋の段(東=伝四)。 ※前項の二の替り。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一八九七	明治30	3/19	名古屋 蓬座	(白石噺) 新吉原揚屋(東=伝四)。 ※相生太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一八九七	明治30	7/27 8/1	京都 南座	(碁太平記白石 噺) (白石噺し) 新吉原揚屋の段(津=吉兵衛)。 揚屋(鶴尾=竹三郎)。 ※越路一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一八九七	明治30	10/26 10/29	京都 南座	(白石) (白石噺) 七ツ目(高尾)。 新吉原(呉)。 ※竹本さの太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一八九七	明治30	12/7	名古屋 音羽座	(白石噺) 吉原段(顧春)。 ※巴太夫・山城太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一八九八	明治31	5/14	名古屋 宝生座	(白石噺) 揚屋(路=団六)。 ※路太夫・山城太夫・鶴尾太夫・団六・大三郎・卯三郎一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一八九八	明治31	5/21	京都 南座	(白石噺) 阪井村(都勢)。 ※庄次郎改野沢喜八郎改名披露の会。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一八九八	明治31	8/1	京都南座	(新吉原) 揚屋の段(高尾)。 ※竹本文字太夫(佐野太夫改め)・竹本文太夫・竹本七五三太夫・竹本高尾太夫等の一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一八九八	明治31	8/15 8/21	名古屋御園座	(白石噺) 新よし原揚屋(高尾=大三郎)。 新吉原揚屋(鶴尾=鶴五郎)。 ※大阪文楽座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一八九八	明治31	8/21	弁天座	白石噺 新吉原(春子)。 ※稲荷座連中。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
△	一八九八	明治31	11	明楽座	碁太平記白石噺 新吉原揚屋の段(中菊、春子)。 ※「十一月五日(十日)ヨリ」(『義太夫年表 明治篇』)。	妹しのぶ(玉米)、大黒や宗六(門蔵)、勘九郎(栄寿)、けいせい宮城の(清十郎)。
△	一八九八	明治31	12/10 12/16・20 12/17	名古屋御園座	(白石噺し) (白石噺) 新よし原(朝=松太郎)。 田植(隅代=小叶)。 新吉原揚屋(住=小団二)。 ※大阪大隈(ママ)一座・東京朝太夫一座による「京阪合併浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一八九九	明治32	3/10	名古屋末広座	(白石噺し) 新吉原(菅=森助)。 ※大阪稲荷座若手一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一八九九	明治32	4	明楽座	碁太平記白石噺 大序より 新よし原まで 大序(小達、隅代、和佐、立身、鑊)、石堂館の段(中和佐、次鑊、切菊)、明神の森の段(正雪-伊達・谷五郎-小隅)、田植の段(鑊、雛)、逆井村の段(中谷路、切新靱)、浅草の段(弥生)、新よし原揚屋の段(中芳、切住)。 ※「四月二日(四日)ヨリ」(『義太夫年表 明治篇』)。	由井正雪(門造)、金谷谷五郎(玉米)、志賀団七(栄寿)、百姓与茂作(兵三)、娘しのぶ・妹しのぶ(簗助)、庄や七郎兵へ(玉松)、与茂作女房(友蔵)、飴売どじやう(玉寿郎)、大黒や宗六(兵三)、甚九郎(紋三)、丸橋忠弥(登次郎)、けいせい宮城の(玉松)。
△	一八九九	明治32	4/23	名古屋西栄座	(白石噺し) 揚屋(菅)。 ※大阪若手浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一八九九	明治32	7/19 7/20 8/2	京都南座	(白石噺) 吉原揚屋の段(むら=吉子)。 吉原揚屋の段(南部=吉作)。 吉原揚屋(文=大三郎)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一八九九	明治32	7/19	東京歌舞伎座	(碁太平記白石噺) 吉原揚屋(菅=寛之助)。 ※素浄瑠璃。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。	

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一八九九	明治32	8/5	京都 岩神座	(白石噺) 吉原揚屋(南部)。 ※素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一八九九	明治32	9/5	名古屋 末広座	(白石噺) 新よし原(雛)。 ※住太夫・春子太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
	一八九九	明治32	10	御霊文楽座	碁太平記白石噺 大序より 七つ目まで 大序 祈念のだん(越喜、七、葉、津子、津矢、越広、谷登、谷代)、 志貴山毘沙門堂霊夢のだん(津直、越可、呂子、越江、巴勢)、由 井ヶ浜のだん(司)、足利持氏館のだん(口小富、中南部、切 源)、明神の森の段(正雪一染・谷五郎一文字)、田植のだん(口登 勢、奥七五三)、逆井村与茂作住家の段(中叶、切染)、浅草雷門 のだん(高尾)、新よし原宮城野部家の段(中むら、切津)。 ※「十月廿一日ヨリ十一月廿三日マデ卅一(卅二)日間」(『義太夫 年表 明治篇』)。	宇次兵部之助正雪(玉助)、金江谷五郎(金之助)、志賀団七・鶺鴒黒右工門(玉朝)、百姓与茂作(三吾)、娘おのぶ(玉造)、娘信夫(紋十郎)、庄屋七郎兵へ(栄三)、女房おさよ(玉治)、飴売どじやう(助太郎)、大黒屋宗六(玉助)、観九郎(玉朝)、丸橋忠弥(金之助)、傾城宮きの(紋十郎)。
△	一八九九	明治32	12/21 12/25	京都 南座	(白石噺) 吉原揚屋(高尾=大三郎)。 揚屋の段(むら=吉子)。 ※竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇〇	明治33	7/22	京都 南座	(白石噺) 吉原揚屋(南部)。 ※文楽座、越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇〇	明治33	8/5 8/12	名古屋 末広座	(白石噺) 新よし原(南部)。 新よし原(むら)。 ※大阪文楽座、竹本文字太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇〇	明治33	12/3 12/8 12/10 12/12	名古屋 末広座	(白石噺) 田植(隅尾=団友)。 新吉原揚屋(住=小団二)。 新吉原揚屋(雛=猿九郎)。 与茂作殺し(隅尾=団友)。 ※明楽座一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇一	明治34	2/2	名古屋 御園座	(白石噺) 揚屋(住治=叶吉)。 ※竹本組太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇一	明治34	4/10	京都 弁天座	(白石) 田植(錦)。 ※素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇一	明治34	5/30 5/31	天満座	白石噺 新吉原(高尾)。 新吉原(春子)。 ※素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一九〇一	明治34	名古屋 千歳座	(白石噺)	田植の段(此路)。 吉原揚屋の段(谷路)。 ※伊達太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇一	明治34	名古屋 歌舞伎座	(白石噺)	吉原揚屋(南部=寛次郎)。 ※越路太夫・文字太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇一	明治34	京都 南座	(白石噺)	吉原揚屋(高尾)。 揚屋の段(南部)。 吉原揚屋(むら)。 吉原揚屋(越路)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇一	明治34	京都 幾代亭	(白石噺)	揚屋(谷路)。 揚屋(小隅)。 ※組太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇一	明治34	名古屋 末広座	(白石噺)	田植(加賀)。 新吉原(春子)。 ※大坂明楽座、竹本大隅太夫・鶴沢叶一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇一	明治34	東京 歌舞伎座	(白石噺)	田植(加賀=伊之助)。 吉原揚屋(伊達=友松)。 ※大隅太夫一座。素浄瑠璃。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。	
△	一九〇一	明治34	名古屋 末広座	(白石噺) (白石噺 し)	田植(此路=小団)。 新吉原揚や(住=小団二)。 ※住太夫・朝太夫ほか。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇二	明治35	京都 布袋座	(碁太平記白石 噺)	新吉原揚屋(切路=団六)。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	(不明)
△	一九〇二	明治35	名古屋 御園座	(白石噺)	吉原揚屋の段(むら=八助)。 ※大阪文楽座、文字太夫・吉弥一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇二	明治35	名古屋 末広座	(白石噺)	田植(生勢)。 ※竹本七五三太夫・生島太夫・さの太夫・豊沢新左衛門・仙十郎・外 十数名。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇二	明治35	京都 岩神座	(白石噺)	吉原揚屋(南部=寛次郎)。 ※大阪文楽座、文字太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一九〇二	明治35	京都 南座	(白石)	(南部)。	
		8/6			(むら)。 ※素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇二	明治35	京都 歌舞伎座	(白石噺)	新吉原(小隅)。 ※大隅太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇二	明治35	京都 岩神座	(白石噺)	七(小隅)。 ※大隅太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇二	明治35	神戸 朝日座	白石噺	新吉原のだん(むら=団七)。 ※芸題二日目替りにて御覧に入申候(番付)。	妹志のぶ(玉六)、娘志のぶ(紋太郎)、大黒屋宗六(政亀)、けいせい宮城野(栄三)。
△	一九〇二	明治35	名古屋 千歳座	(白石噺)	田植(染代)。	
		12/14			新吉原(住)。 ※「大坂文楽明楽合併大浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇二	明治35	京都 夷谷座	(白石噺)	吉原揚屋(春子)。 ※組太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇三	明治36	東京 歌舞伎座	(碁太平記白石噺)	新吉原揚屋(小隅=松之助)。 ※『歌舞伎座百年史』、『演芸世界』第31号に拠る。	おのぶ(玉助)。
△	一九〇三	明治36	京都 南座	(碁太平記白石噺)	揚屋(南部=寛次郎)。	
		8/29			(白石噺) 揚屋(むら=亀太郎)。 ※文字太夫改め越路太夫・むら太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇三	明治36	京都 千本座	(碁太平記白石噺)	揚屋(むら)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇三	明治36	名古屋 千歳座	(白石噺)	新吉原ノ段(葉)。	
		12/2			田植(生勢)。 ※大坂明楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇四	明治37	御霊文楽座	碁太平記白石噺	浅草奥山の段(南部)、新吉原揚屋のだん(切 撰津大掾=吉兵衛)。 ※「一月二日ヨリ一月廿七日マデ廿六日間」(『義太夫年表 明治篇』)。 ※「撰津病氣ノ為越路初日ヨリ打上ゲ迄代役」(『義太夫年表 明治篇』)。 ※三味線は茶谷半次郎『聞書 芸と文学』に拠る。	妹おのぶ(玉造)、飴売どじやう(助太郎)、大黒屋宗六(玉助)、観九郎(玉治)、傾城宮城の(紋十郎)。

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一九〇四	明治37	名古屋 御園座	(白石噺)	揚屋の段(むら)。	
				(新吉原)	揚屋(南部)。	
				(新吉原)	揚屋(時)。 ※越路太夫・文太夫・南都太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇四	明治37	京都 歌舞伎座	(碁太平記白石 噺)	吉原揚屋(南部=寛次郎)。	
					田植(南勢=常造)。	
					吉原揚屋(むら=吉松)。	
					逆井村(南勢=常造)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇四	明治37	京都 千本座	(白石)	田植之段(南勢)。	
				(白石噺)	揚屋(むら)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇四	明治37	天満座	(碁太平記白石 噺)	新吉原揚屋(南部)。 ※素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
△	一九〇四	明治37	名古屋 歌舞伎座	(白石噺)	吉原揚屋の段(鏝)。 ※竹本大隅太夫・伊達太夫・長子太夫・鏝太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇四	明治37	東京 歌舞伎座	(白石噺)	吉原揚屋(南部=寛治郎)。	
					(南勢=常造)。 ※大阪文楽義太夫一座。素浄瑠璃。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。	
△	一九〇五	明治38	京都 朝日座	(碁太平記白石 噺)	新吉原揚屋(葉=団三郎)。	
					田植(米=広市)。 ※伊達太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇五	明治38	名古屋 新守座	(白石噺)	田植の段(文字子)。	
					吉原揚屋の段(時)。	
					揚屋(さの)。	
					新吉原(文字)。 ※文字子太夫の誤植カ。 ※竹本住太夫・竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇五	明治38	京都 岩神座	(白石噺)	田植(米)。 ※竹本伊達太夫・竹本長子太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一九〇五	明治38	名古屋 新守座	(白石噺)	揚屋(津葉女)。	
		7/8			新吉原(千代)。 ※竹本文太夫一座による「大阪ノ文楽若手浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇五	明治38	東京 歌舞伎座	(白石)	(米=広市)。 (隅野=清太郎)。 ※竹本大隅太夫一座。素浄瑠璃。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。	
		7/22				
△	一九〇五	明治38	京都 南座	(碁太平記白石 噺)	新吉原(津磨)。 ※大阪文楽座青年連、南部太夫・猿糸一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇五	明治38	名古屋 千歳座	(白石噺)	吉原揚屋(津磨)。	
				9/1	(白石)	
△	一九〇五	明治38	京都 明治座	(白石)	揚屋(鏝)。 ※摂津大掾・大隅太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇六	明治39	京都 南座	(白石)	揚屋(時)。	
		2/3		(白石噺)	田植(文字子)。	
		2/6		(白石)	揚屋(むら)。	
		2/9			揚屋(住)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇六	明治39	京都 南座	(白石噺)	田植(文字子)。 ※故紫福七回忌追悼の浄瑠璃会。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇六	明治39	京都 岩神座	(白石)	揚屋(時)。 揚屋(むら)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
		2/18				
△	一九〇六	明治39	堀江座	碁太平記白石噺	浅草門前のだん(口花、奥雛=*竹三郎)、新吉原揚屋のだん(中司、切住=*龍助、此所人形出遣いにて御覧に入候)。 ※「白石噺ノ揚屋ヲ院本通り上演」(『義太夫年表 明治篇』備考欄)。	由井正雪(玉松)、志賀団七(東三郎)、妹しのぶ(玉治)、どじやう(光ル)、宗六(兵吉)、勘九郎(紋三)、けいせい宮ぎの(簗助)。
△	一九〇六	明治39	天満座	(白石噺)	揚屋(葉)。 ※青年太夫による素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
△	一九〇六	明治39	京都 歌舞伎座	(碁太平記白石 噺)	吉原揚屋(南部)。 ※大隅太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
△	一九〇六	明治39	名古屋 末広座	(白石噺)	(時)。		
		8/3			田植(文字子)。		
		8/6 8/11			揚屋(さの)。 ※大阪文楽座、竹本越路太夫一座。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。		
△	一九〇六	明治39	8/7	京都 千本座	(白石)	揚屋(津磨)。 ※南部太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇六	明治39	8/12	名古屋 歌舞伎座	(白石噺)	揚屋(雛)。 ※竹本津ばめ太夫ほかによる「大阪若手浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
	一九〇六	明治39	9	御霊文楽座	碁太平記白石噺 大序より 七つ目段まで	大序 祈りのだん(南戸、南芳、時尾、稲葉、福、勢尾、千鳥、富子、喜、文字子、いさ、広見)、志貴毘沙門堂のだん(須磨、広、津磨、谷登、葉、越可)、由井ヶ浜のだん(千代)、足利館のだん(口南勢、中登勢、切勢見)、明神森のだん(正雪一源・谷五郎一さの)、田植のだん(口越喜、奥文)、逆井村与茂作住家のだん(中富、切染)、浅草雷門のだん(口津直、奥南部)、宮城野部家のだん(切津=猿糸)。 ※角書「姉宮城野/妹お能婦」。 ※「九月廿一日ヨリ十一月五日マデ四十四日間、九月卅日大掃除ニツキ休業」(『義太夫年表 明治篇』)。	宇治兵部之介正雪(門造)、金江谷五郎(栄三)、志賀団七(玉治郎)、百姓与茂作(門造)、妹おのぶ(玉造)、庄屋七郎兵衛(多為蔵)、女房おさよ(三吾)、香具師どじやう(栄三)、大黒屋惣六(多為蔵)、観九郎(玉治郎)、丸橋忠弥(紋之助)、傾城宮城野(紋十郎)。
△	一九〇六	明治39	名古屋 末広座	(碁太平記白石噺)	揚屋(住=龍助)。		
		12/7 12/10		(白石噺)	(菅=友三郎)。 ※朝太夫・松太郎一座、住太夫・龍助一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。		
△	一九〇七	明治40	京都 南座	(白石)	揚屋(南部=綱造)。		
		8/7			田植(南勢=広一)。		
		8/8 8/10			明神森(南芳=山作)。 ※撰津大掾一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。		
△	一九〇七	明治40	8/19	京都 大宮座	(白石)	揚屋(米)。 ※南部太夫・源太夫・さの太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇七	明治40	9/4~5	京都 南座	(白石)	揚座(米)。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	(不明)
△	一九〇七	明治40	9/8~9	京都 南座	(白石噺)	田植段、逆井村段、浅草段、吉原揚屋段。 ※祇甲明治連(太棹芸妓)に桐竹紋十郎文楽一座が参加した水害地義捐人形浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	(不明)

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一九〇七	明治40	名古屋 御園座	(碁太平記白石 噺)	田植(南勢)。	
		12/12			揚屋の段(時)。 ※大阪文楽座、竹本越路太夫・メ太夫・南部太夫・時太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇七	明治40	名古屋 末広座	(白石噺) (碁太平記白石 噺)	(富子)。	
		12/19			新吉原(住=龍助)。 ※「大阪文楽/堀江両座合併大浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇八	明治41	名古屋 末広座	(白石噺)	田うへの段(組栄=仙市)。	
		4/12			吉原揚屋の段(鑿=竹三郎)。 ※「大坂堀江座大浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
	一九〇八	明治41	堀江座	碁太平記白石噺 大序より 新吉原揚屋まで	大序 夢のだん(津路、小達、春賀、春代、隅越、隅栄、新菅、初音、柴)、石堂のだん(口小国、中敷嶋、次里、切絹)、明神の森のだん(正雪一三笠・谷五郎一静、此所人形出遣いにて御覧に入申候)、田植のだん(口薫、奥雛)、逆井むらのだん(中寿、切住)、浅草のだん(口組栄、奥鑿)、新吉原揚屋のだん(中司、切伊達=*吉三郎、此所人形出遣いにて御覧に入申候)。 ※「五月十五日マデ」(『義太夫年表 明治篇』)。	由井正雪(東吉)、金井谷五郎(政亀)、志賀団七(紋三)、与茂作(文造)、妹おのぶ(小兵吉)、娘しのぶ(亀松)、庄屋七郎兵へ(冠四)、与茂作女房(東助)、どじやう(玉市)、大福屋宗六(兵吉)、勘九郎(清吉)、丸橋忠弥(清吉)、宮城野(亀松)。
△	一九〇八	明治41	名古屋 御園座	(白石)	田植(柴=助八)。	
		7/11			田植(南勢=広太郎)。 ※大阪文楽一座。竹本摂津大掾名古屋一世一代。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇八	明治41	京都 南座	(白石噺)	吉原(寿)。	
		8/4			田植(組栄)。	
		8/7			(白石) 七ツ目(組栄)。 ※大隅太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇八	明治41	京都 南座	(白石噺)	田植(南勢=芳之助)。	
		9/8			揚屋(南部=寛次郎)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇八	明治41	京都 岩神座	(白石噺)	揚屋(里)。 ※文太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇八	明治41	東京 歌舞伎座	(白石)	揚屋(南部=寛治郎)。 ※竹本摂津大掾一座。素浄瑠璃。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。	
△	一九〇九	明治42	京都 南座	(白石噺)	吉原揚屋(むら=文平)。 ※文楽一座、越路太夫・村太夫・南部太夫・呂太夫ほか。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一九〇九	明治42	7/28	名古屋 千歳座	(白石噺) (組栄)。 ※竹本伊達太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇九	明治42	8/18~	常盤座	(白石) 揚屋(雛=竹三郎)。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	(不明)
△	一九〇九	明治42	8/21	京都 岩神座	(白石) (明石)。 ※大阪文楽座、染太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇九	明治42	8/23	名古屋 御園座	(白石) 田植(文字子)。 ※大阪文楽座、越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九〇九	明治42	9/2 9/7	京都 南座	(碁太平記白石 噺) 揚屋(村=兵内)。 新吉原(古靱=清六)。 ※大阪文楽一座、越路太夫・南部太夫・鶴尾太夫・常子太夫・古靱太夫ほか。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇九	明治42	9/9	京都 国華座	(碁太平記白石 噺) 吉原揚屋(寿=善作)。 ※「東阪合同浄瑠璃会」の内。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九〇九	明治42	12/4	角座	(碁太平記白石 噺) 新吉原揚屋(雛)。 ※堀江座連による「浄瑠璃会」。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
△	一九一〇	明治43	2/16	京都 明治座	(白石噺) (むら)。 ※大阪文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
	一九一〇	明治43	5/1~	堀江座	碁太平記白石噺 夢のданより 新吉原揚屋迄 大序 夢のдан(菅栄、司喜、早稲、旗、小苗、音名、小司、雛栄、小幾、美島、的、春日、明石、春次、菅尾、東、雛子)、由井ヶ浜のだん(新菅、春代、小藤、春見、初音、三、生栄)、石堂館のだん(口三、中生栄=*団市、次 敷嶋=*団次郎、切 絹=*団友)、明神の森のだん(正雪一角・谷五郎一錦、此所人形出遣いにて御覧に入申候)、田植のだん(口 栄=*吉郎、奥 司)、逆井村与茂作住家のだん(中 米=*富次、切 長子=*八助)、浅草雷門のだん(口 薫=*竜太郎、奥 角)、吉原揚屋宮城の部家のだん(中 司、切 伊達=*吉三郎、此所人形出遣いにて御覧に入申候)。	由井正雪(東吉)、金谷谷五郎(政亀)、志賀団七(光ル)、百姓与茂作(文造)、妹しのぶ(小兵吉)、庄屋七郎兵衛(駒十郎)、与茂作女房(冠四)、どじやう(光ル)、大黒屋宗六(兵吉)、勘九郎(清吉)、丸橋忠弥(玉吉)、傾城宮城野(文五郎)。
	一九一〇	明治43	5/14	東京 牛込亭	白石噺 吉原揚屋の段(朝=松太郎)。	
△	一九一〇	明治43	7/9	名古屋 末広座	(白石噺) 揚屋(伊達=吉三郎)。 ※大隅太夫・団平一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九一〇	明治43	7/21	名古屋 御園座	(白石噺) (むら=友之助)。 ※大阪文楽座附竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一九一〇	明治43	京都 南座	(碁太平記白石 噺)	揚屋(むら=兵三)。	
		8/2			揚屋(古靱=清六)。 ※文楽一座、越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九一〇	明治43	京都 国華座	(白石噺)	吉原揚屋(村=兵三)。 ※越路太夫・津太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九一〇	明治43	京都 歌舞伎座	(白石噺)	揚屋(鏝)。	
		8/23			田植(明石)。 ※南部太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九一〇	明治43	京都 岩神座	(白石噺)	揚屋(淀)。 ※南部太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九一〇	明治43	京都 明治座	(碁太平記白石 噺)	新吉原揚屋(富)。	
		10/18			田植(富子)。 ※大阪文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九一〇	明治43	名古屋 御園座	(白石噺)	田植(文字子)。 ※大阪文楽座、越路太夫・七五三太夫・古靱太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九一一	明治44	名古屋 朝日座	(白石噺)	(薩摩)。 ※浄瑠璃身振演劇。大阪文楽薩摩太夫一行に中京素人浄瑠璃連。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九一一	明治44	名古屋 御園座	(碁太平記白石 噺)	吉原揚屋(時=鶴太郎)。	
		3/23			揚屋(淀)。 ※竹本南部太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九一一	明治44	御霊文楽座	碁太平記白石噺	宮城野部家のだん(中むら、切南部)。 ※「七月五日マデ卅四(卅五)日間」(『義太夫年表 明治篇』)。	妹おのぶ(三左衛門)、大黒屋宗六(栄三)、 宮城野(玉五郎)。
△	一九一一	明治44	京都 歌舞伎座	(碁太平記白石 噺)	揚屋(むら=兵三)。	
		7/7			(南部=猿糸)。 ※文楽一座、越路一行。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九一一	明治44	浪花座	(碁太平記白石 噺)	新吉原揚屋(南部)。	
		8/5			新吉原揚屋(むら)。 ※文楽座連中による「浄瑠璃大会」。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
					8/11	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
△	一九一一	明治44	9/1 9/2	京都 南座	(白石噺) (白石)	(むら=兵三)。 田植(南次=吉右)。 ※文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九一一	明治44	10/9	名古屋 末広座	(白石)	揚屋(雛=富太郎)。 ※「大阪堀江座大浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九一一	明治44	12/18	名古屋 御園座	(白石噺)	田植(南芳)。 ※越路太夫・南部太夫一行。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九一二	明治45	4/14	京都 開盛座	(碁太平記白石噺)	吉原揚屋(鳴門)。 ※近松座若手連中。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
	一九一二	明治45	4/21~	近松座	碁太平記白石噺 夢の段より 揚屋まで	夢のだん(灘)、明神の森のだん(毎日かわり 正雪一鑊/錦・谷五郎一鑊/鑊、此所人形出遣いにて御覧に入候)、田植のだん(口薫、奥菅)、逆井村のだん(中三笠、切 毎日かわり 長子/大嶋=*源吉)、浅草雷門のだん(口琴、奥 毎日かわり 大嶋/長子)、新吉原揚屋のだん(中菅=*助三郎、切 大隅、此所人形出遣いにて御覧に入候)。	由井民部之輔正雪(駒十郎)、金江谷五郎(文五郎)、志賀団七(門治)、与茂作(小伊三郎)、妹しのぶ(小兵吉)、庄屋七郎兵衛(兵三)、母おさよ(冠四)、どじやう(光ル)、大黒屋宗六(兵吉)、勘九郎(清吉)、丸橋忠弥(兵吉)、けいせい宮城野(文五郎)。
△	一九一二	明治45	7/13 7/17	浪花座	(白石噺) (碁太平記白石噺)	田植(越穂=吉一郎)。 新吉原揚屋(南部=友次郎)。 ※文楽座連中による「浄瑠璃大会」。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
△	一九一二	大正1	12/20	京都 明治座	(白石噺)	※女義太夫呂昇一座に文楽座人形入り。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	信夫(玉七)、惣六(清枝)、宮城野(玉五郎)。
△	一九一三	大正2	2/9 2/10 2/14	京都 南座	(白石噺) (碁太平記白石噺)	田植(組栄)。 揚屋(鑊)。 揚屋(雛)。 ※大阪近松座引越し、大隅一派。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九一三	大正2	2/22	名古屋 末広座	(碁太平記白石噺)	揚屋(組栄=広市)。 ※大隅太夫・団平、伊達太夫・徳太郎、錦太夫・仙市、ほか。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九一三	大正2	11/5	名古屋 帝国座	(白石)	揚屋(桂)。 ※近松座、竹本伊達太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九一三	大正2	11/19	京都 明治座	(吉原)	揚屋(むら=友造)。 ※『義太夫年表 大正篇』では三味線を友之助とする。 ※文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』、『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
△	一九一三	大正2	12/6	東京 明治座	(碁太平記白石 噺)	揚屋(島=小団)。 ※近松座。素浄瑠璃。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△	一九一三	大正2	12/6	名古屋 新守座	(白石)	(錦)。 ※義太夫大会。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九一三	大正2	12/7 12/9	東京 新富座	(碁太平記白石 噺)	揚屋(むら=友之助)。 揚屋(常子)。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△	一九一三	大正2	12/13	名古屋 御園座	(碁太平記白石 噺)	新吉原揚屋(常子)。 ※竹本越路大夫・野沢吉兵衛一行。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九一四	大正3	5/8	京都 岩神座	(白石)	揚屋(淀)。 ※大阪文楽座、鑊太夫・団六ほか。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九一四	大正3	7/14	京都 南座	(碁太平記白石 噺)	揚屋(鑊=団六)。 ※大阪文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』、『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△	一九一四	大正3	7/19	名古屋 御園座	(碁太平記白石 噺)	田植(鶴尾)。 ※竹本越路大夫一座。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	(不明)
△	一九一四	大正3	7カ	東京 浅草花屋敷	(白石 噺)	新吉原揚屋の段(常陸)。 ※吉田冠十郎一座。 ※『演劇画報』(大正3年10月)に拠る。	(不明)
△	一九一四	大正3	8/6	東京 新富座	(碁太平記白石 噺)	揚屋(鑊=団六)。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△	一九一四	大正3	8/18	名古屋 末広座	(白石)	(初)。 ※竹本錦太夫・豊沢団平一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九一四	大正3	12/10	名古屋 御園座	(碁太平記白石 噺)	田植(鶴尾)。 ※大阪文楽座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九一五	大正4	7/2	京都 南座	(碁太平記白石 噺)	吉原揚屋(八十=友之助)。 ※大阪文楽座、越路大夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』、『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一九一五	大正4	浪花座	(碁太平記白石噺)	新吉原揚屋(八十=友之助)。	
					新吉原揚屋(駒=勝三次)。 ※「浄瑠璃大会」の内。 ※『義太夫年表 大正篇』では、三味線は鶴沢三二とする。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』、『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△	一九一五	大正4	名古屋御園座	(新吉原)	揚屋(常子改め八十)。 ※越路太夫一行。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九一五	大正4	名古屋御園座	(新吉原) (碁太平記白石噺)	揚屋(八十=友之助)。	(不明)
					田植(文字子)。 ※大阪御霊文楽座、竹本越路太夫一座。4日の演目は素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九一五	大正4	名古屋末広座	(碁太平記白石噺)	新吉原(鏝)。 ※竹本伊達太夫一座。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	(不明)
	一九一六	大正5	近松座	白石噺	浅草雷門のだん(毎日替り 敷島=龍太郎//東=新之介/小団/仙松)、同奥山のだん(米=源吉)、揚屋のだん(組栄=吉郎、雛=力松)。 ※浄瑠璃身振義振會。 ※「二十日間(十日迄大入客止め)」(『義太夫年表 大正篇』)。 ※「雷門の場は東一人の受け持ちの様で有た」(『浄瑠璃雑誌』第152号)。	
△	一九一六	大正5	名古屋末広座	(白石)	揚屋(明石)。 ※竹本春子太夫・鶴沢寛六等外十数名の大一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九一六	大正5	京都南座	(新吉原) (白石) (碁太平記白石噺) (新吉原)	揚屋の段(八十=友之助)。	
					田植の段(常子=友平)。	
					新吉原(むら=一弥)。	
					揚屋(むら=一弥)。 ※大阪文楽座引越、竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九一六	大正5	京都明治座	(白石噺)	吉原揚屋(米)。	
					(朝見)。 ※竹本朝太夫一行。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九一六	大正5	名古屋末広座	(白石)	揚屋(朝見=芳太郎)。 ※東京 竹本朝太夫・豊沢松太郎一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
	一九一六	大正5	御霊文楽座	碁太平記白石噺	新吉原揚屋のだん(中 淀=*団六、切 南部=*寛治郎)。 ※「二十八日間」(『義太夫年表 大正篇』)。	妹おのぶ(文五郎)、大黒屋惣六(玉蔵)、姉宮城野(栄三)。

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
△	一九一六	大正5	東京 歌舞伎座	(白石)	揚屋(南部=寛治郎)。		
				(碁太平記白石噺)	田植(常子=小綱)。		
					揚屋(むら=友之助)。 ※文楽座、竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。		
△	一九一七	大正6	1/13	堀江座	(碁太平記白石噺)	吉原揚屋(菅)。 ※豊沢新之助改め三代豊沢新三郎名披露浄瑠璃会。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』、『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
	一九一七	大正6	3/1~	竹豊座	碁太平記白石噺	浅草雷門のだん(敷嶋)、吉原揚屋のだん(切時=*兵吉)、敵討のだん(カケ合)。 ※「二十四日間(十四日間大入)」(『義太夫年表 大正篇』)。	妹しのぶ(紋太郎)、どじやう(光ル)、大黒や宗六(辰五郎)、勘九郎(三郎)、宮城野(小兵吉)。
△	一九一七	大正6	名古屋 末広座	(白石)	(明石=清二郎)。		
				(碁太平記白石噺)	揚屋(明石=清二郎)。 ※豊竹古鞠太夫・鶴沢清六一行。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。		
△	一九一七	大正6	京都 南座	(新吉原)	揚屋の段(伊達=吉三郎)。		
					揚屋の段(常子=友平)。 ※竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。		
△	一九一七	大正6	7/13	名古屋 末広座	(碁太平記白石噺)	吉原揚屋(組栄=団二郎)。 ※近松座、竹本錦太夫・竹本角太夫一行。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九一七	大正6	東京 歌舞伎座	(碁太平記白石噺)	揚屋(八十=一弥)。		
					(白石)		揚屋(伊達=吉三郎)。 ※大阪文楽座浄瑠璃一座。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。
	一九一八	大正7	6/23~	御霊文楽座	碁太平記白石噺 大序より 七ツ目まで	大序 祈念のだん(播路、越名、伊達男、陸路、南枝、富栄、つばめ、越登、辰、吉野、小町、津花)、志貴山毘沙門堂の段(三滝、谷登、越穂、和)、足利持氏館のだん(口小富/常子、中英、切菅)、明神森のだん(正雪一録・谷五郎一静=*寛治郎)、田植のだん(口越代、奥駒)、逆井村与茂作住家の段(中静、切弥=*清六)、浅草奥山のだん(口鶴尾、奥源=*勝市)、新吉原揚屋のだん(中八十、切伊達=*吉三郎)。 ※角書「姉宮城野/妹おのぶ」。 ※「十八日間 節季休みせず打越し十日打上 十一、二日もらい」(『義太夫年表 大正篇』)。 ※竹本静太夫の三味線は彼のメモでは野沢錦糸、劇評では鶴沢芳之助(『義太夫年表 大正篇』備考欄に拠る)。	宇治兵部正雪(文三)、金江谷五郎(玉治郎)、志賀台七(紋三)、百姓与茂作(冠四)、親父与茂作(玉蔵)、妹おのぶ(栄三)、庄屋七郎兵衛(玉蔵)、女房おさよ(玉五郎)、飴売どじやう(文三)、大黒屋惣六(玉蔵)、観九郎(紋三)、丸橋忠弥(玉七)、娘宮城野(文五郎)。

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一九一八	大正7	名古屋 御園座	(新吉原)	揚屋(伊達=吉三郎)。	
				(白石口)	(津花)。 ※竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	一九一八	大正7	京都 南座	(新吉原)	揚屋(むら)。 ※大阪文楽座引越、越路一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九一八	大正7	東京 歌舞伎座	(碁太平記白石 噺)	揚屋(常子)。 揚屋(駒=吉五郎)。 ※大阪文楽座、竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。	
	一九一九	大正8	竹豊座	碁太平記白石噺	吉原揚屋のだん(簾)。	妹おのぶ(小兵吉)、大黒屋宗六(文太郎)、 宮城野(玉米)。
△	一九一九	大正8	京都 南座	(碁太平記白石 噺)	揚屋(南部=寛治郎)。 ※大阪文楽座引越、竹本越路太夫。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九一九	大正8	浪花座	(碁太平記白石 噺)	揚屋(駒=吉五郎)。 ※文楽座連中による「浄瑠璃大会」。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
△	一九一九	大正8	東京 歌舞伎座	(碁太平記白石 噺)	揚屋(南部=寛治郎)。	
				(白石噺)	田植(津花=友二)。	
				(碁太平記白石 噺)	揚屋(常子=友平)。 ※大阪文楽座浄瑠璃大一座。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。	
△	一九一九	大正8	名古屋 御園座	(白石噺)	(常子=友平)。	(不明)
				(碁太平記白石 噺)	新吉原(津花)。 ※竹本越路太夫一座。24日の演目は素浄瑠璃カ。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
	一九二〇	大正9	竹豊座	碁太平記白石噺	吉原揚屋のだん(春若、簾=*団二郎)。	妹おのぶ(兵次)、大黒屋宗六(兵十郎)、 宮城野(扇太郎)。
△	一九二〇	大正9	中座	(碁太平記白石 噺)	新吉原揚屋(駒=錦糸)。 ※文楽座連中による「浄瑠璃会」。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
△	一九二〇	大正9	名古屋 御園座	(碁太平記白石 噺)	揚屋(常子=友平)。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△	一九二〇	大正9	京都 南座	(碁太平記白石 噺)	揚屋(常子=友平)。 ※大阪文楽座引越、越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
一九二〇	大正9	10/15~	御霊文楽座	碁太平記白石噺 大序より 七ツ目まで	大序 祈念のどん(津駒、雀、淀路、陸路、弥須、富栄、源福、越名)、志貴山毘沙門堂のどん(鏡、つばめ、津花、三滝、越穂)、足利持氏館のどん(口 小富、中 津国/和泉、切 菅)、明神森のどん(正雪一葉・谷五郎一源)、田植のどん(口 源路、奥 叶)、逆井村のどん(中 淀/八十、切 津)、浅草奥山のどん(口 常子、奥駒)、吉原揚屋のどん(切 伊達=*吉三郎)。 ※「十一月十七日千秋楽」(『義太夫年表 大正篇』)。	宇治兵衛正雪(文三)、金江谷五郎(栄三)、志賀台七(玉治郎)、百姓与茂作(玉五郎)、妹おのぶ(文五郎)、庄屋七郎兵衛(辰五郎)、母おさよ(冠四)、香具師どぢやう(紋三)、大黒屋惣六(玉蔵)、親九郎(政亀)、丸橋忠弥(玉七)、娘宮城野(栄三)。	
△	一九二〇	大正9	11/10	東京 有 楽 座	(碁太平記白石 噺)	揚屋(鏝=吉作)。 ※名流演奏会。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△	一九二一	大正10	7/6	京都 南 座	(白 石 噺)	田植(津駒=寛若)。 ※『義太夫年表 大正篇』は三味線を八造とする。	
		7/8	揚屋(常子=友平)。 ※大阪文楽一座引越し。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。				
△	一九二一	大正10	8/3	名古屋 御 園 座	(白 石 噺)	(駒=錦糸)。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
	一九二二	大正11	4/18~	御霊文楽座	碁太平記白石噺 大序より 七ツ目まで	大序 祈念のどん(亀久、呂智、雀、南枝、清、淀路、陸路、富栄、辰)、志貴山毘沙門堂のどん(源福、越登、文、越名)、足利持氏館のどん(口 三滝/越穂、中 小富/源路/常子、切 八十)、明神森のどん(定雪一葉・谷五郎一静)、田植のどん(口 和泉/鶴尾、奥駒)、逆井村与茂作住家のどん(中 静=*徳太郎、切 弥=*吉弥)、浅草奥山のどん(口 町、奥 鏝)、新吉原揚屋のどん(切 南部=*寛治郎)。 ※「二十三日間 五月十日打上」(『義太夫年表 大正篇』)。 ※竹本南部太夫4月24日没、竹本叶太夫代演(『義太夫年表 大正篇』備考欄に拠る)。	宇治兵部ノ介定雪(玉蔵)、金江金五郎(玉次郎)、志賀台七(紋三)、百姓与茂作(琴糸)、妹おのぶ(文五郎)、庄屋七郎兵衛(辰五郎)、母おさよ(徳丸)、飴売どぢやう(紋三)、大黒屋惣六(文三)、親九郎(玉次郎)、丸橋忠弥(簗助)、傾城宮城野(栄三)。
△	一九二二	大正11	7/17	名古屋 末 広 座	(碁太平記白石 噺)	揚屋(文=友衛門)。 ※大阪文楽座。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	(不明)
△	一九二二	大正11	7/28カ	京都 中 座	(新 吉 原)	揚屋(常子=寛市)。 ※大阪文楽座若手連引つ越し。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九二二	大正11	8/9	京都 南 座	(白 石 噺)	吉原揚屋(文=友左(ママ)衛門)。 ※文楽座引越し、津太夫・古靱太夫ほか。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九二三	大正12	6/27	御霊文楽座カ	(碁太平記白石 噺)	大序(富栄=兵市、他)、明神の森(カケ合 源路・つばめ=清二郎)、田植(陸路=友作、綾=寛市、三滝=友二)、逆井村(和泉=八助、鶴尾=芳之助)、浅草(源福=喜代之助、小富=友若)、吉原揚屋(町=錦糸)。 ※第2回向上会。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	正雪(玉松)、金江谷五郎(玉八)、志賀団七(玉幸)、与茂作(琴糸)、しのぶ(簗助)、庄屋七良兵衛(玉徳)、母おさよ(玉米)、飴売どぢやう(玉徳)、惣六(政亀)、親(ママ)九郎(玉松)、宮城野(玉七)。

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一九二三	大正12	8/5	浪花座	(碁太平記白石噺) 吉原揚屋(鑊=団六)。 ※文楽座連中による「浄瑠璃大会」。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
	一九二三	大正12	12/1~	京都 新京極文楽座	碁太平記白石噺 田植より 揚屋迄 田植のだん(口 陸路=勝造//呂智=新吉、奥 源路=浅造)、逆井村 与茂作内のだん(中 文=友衛門、切 八十=勝平)、浅草雷門のだん (口 呂智=新吉//陸路=勝造、奥 相生=友之助)、吉原揚屋のだん (切 鑊=新左衛門)。 ※チラシにつき他と形式不揃(『義太夫年表 大正篇』備考欄)。	由比正雪(小兵吉)、金江谷五郎(玉八)、志 賀台七(新三郎)、百姓与茂作(三郎)、娘お のぶ(紋太郎)、庄屋七郎兵衛(兵十郎)、母 おさよ(三郎)、香具師どじょう(玉八)、大 黒屋惣六(玉次郎)、観九郎(光造)、宮城野 (栄三)。
	一九二四	大正13	5/3~	御霊文楽座	碁太平記白石噺 大序より 吉原揚屋まで 大序 祈念のだん(駒尾、津若、駒登、照、雀、淀路、浜子、播路、亀 久、呂智)、志貴山毘沙門堂のだん(辰、源福、越登、文)、序切 足 利持氏館のだん(辰/呂智、綾/文、和泉)、明神森のだん(正雪一 静・谷五郎一町)、田植のだん(口 三滝/越穂、奥 淀=*歌助)、 逆井村のだん(中 相生=*友之助、切 弥=*猿糸)、浅草雷門のだ ん(口 源路/富、奥 源=*勝市)、吉原揚屋のだん(切 伊達=*吉 三郎)。 ※「二十六日間 二十八日打上」(『義太夫年表 大正篇』)。	宇治正雪(玉蔵)、金屋谷五郎(政亀)、志賀 台七(玉幸)、百姓与茂作(琴糸)、娘おのぶ (玉七)、庄屋七郎兵衛(辰五郎)、女房おさ よ(冠四)、飴売どぢやう(辰五郎)、大黒屋 惣六(玉蔵)、観九郎(文三)、丸橋忠弥(琴 糸)、傾城宮城野(栄三)。
△	一九二四	大正13	7/18	中座	(碁太平記白石 噺) 吉原揚屋(鑊=団六)。 ※文楽座連中による「浄瑠璃演奏会」。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
△	一九二四	大正13	8	名古屋 新守座	(碁太平記白石 噺) 揚屋。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	(不明)
	一九二五	大正14	2/15~	京都 新京極文楽座	碁太平記白石噺 田植のだん(口 弥生/亀久=新吉、稲丸、吉房、六三郎、奥 綾=玉 勝)、浅草雷門のだん(口 亀久=吉房、奥 富=浅造)、吉原揚屋の だん(切 和泉=芳之助)。	志賀台七(兵松)、百姓与茂作(兵十郎)、娘 おのぶ(紋太郎)、庄屋七郎兵衛(冠造)、香 具師どぢやう(玉市)、大黒屋宗六(小兵 吉)、観九郎(兵十郎)、宮城野(扇太郎)。
△	一九二五	大正14	8/12	中座	(碁太平記白石 噺) 新吉原揚屋(越登=浅造)。 ※文楽座連中による「涼み素浄瑠璃」。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
△	一九二六	大正15	6/22 6/25	京都 南座	(碁太平記白石 噺) 新吉原揚屋の段(鑊=新左衛門)。 新吉原揚屋の段(越名=友衛門)。 ※文楽座引越し、豊竹古鞠太夫・竹本土佐太夫ほか。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	一九二六	大正15	7/24~25	名古屋 御園座	(白石噺) 雷門(鏡=清二郎)、揚屋(土佐=吉三郎)。 ※文楽座引越興行。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』、『御園座七十年史』に拠る。	信夫(簗助)、宗六(栄三)、宮城野(文五 郎)。
	一九二六	大正15	8/3~5	東京 歌舞伎座	碁太平記白石噺 浅草雷門の段(鏡=清二郎)、新吉原揚屋の段(土佐=吉三郎)。	妹しのぶ(簗助)、飴売どぢやう(玉徳)、大黒 屋宗六(栄三)、金貸勘九郎(玉幸)、傾城宮 城野(文五郎)。
△	一九二七	昭和2	2/23	朝日会館	(白石) 揚屋(梅若改め 源平=清二郎)。 ※竹本源平太夫(元力士)断髪を兼ね披露会。 ※『浄瑠璃雑誌』第257号に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一九二七	昭和2	8/26	東京 歌舞伎座	(碁太平記白石 噺) 新吉原揚屋(和泉=清二郎)。 ※大阪文楽座義太夫一座。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。	
	一九二七	昭和2	10/1~20	弁天座	碁太平記白石噺 大序 祈念の段(津磨、佐久、隅尾、駒司、源左、源喜、源賀、長、武蔵、源平、常子、源子、小松、伊達喜、照、隅栄、駒尾、駒登、淀路=稲丸)、志貴山毘沙門堂の段(播路、亀久、陸路、長子、千駒、辰、源福=友作、他)、足利持氏館の段(口 陸路=新吉、中 越穂=叶太郎、切 文字=勝平)、明神森の段(正雪=和泉・谷五郎=島=叶)、田植の段(口 富=猿二郎/清二郎//源路=友之助/八助、奥つばめ=勝市)、逆井村の段(中 相生=歌助/友平/綱右衛門、切駒=才治)、浅草雷門の段(口 越名=友造/友若/友衛門//鏡=団六、奥 鑊=新左衛門)、吉原揚屋の段(切 土佐=吉兵衛)。 ※千種楽は『松竹関西演劇誌』に拠る。	宇治正雪(玉松)、金江谷五郎(政亀)、志賀団七(玉幸)、親与茂作(兵十郎)、娘しのぶ(紋十郎)、庄屋七郎兵衛(小兵吉)、女房おさよ(冠四)、飴売どぢよう(玉徳)、大黒屋宗六(栄三)、観九郎(玉市)、丸橋忠弥(扇太郎)、傾城宮城野(文五郎)。
△	一九二七	昭和2	12/11	東京浅草 宮戸座	(新吉原) 揚屋(和国=紋左衛門)。 ※大日本義太夫因会大会。 ※『浄瑠璃雑誌』第265号に拠る。	
	一九二七	昭和2	12/20	浪花座	(白石噺) 吉原揚屋の段(和泉=友造)。 ※若手素浄瑠璃。	
△	一九二八	昭和3	1/7	岡山 岡山劇場	(碁太平記白石 噺) 揚屋(越名=浅造)。 ※竹本土佐太夫一行巡業(1月6~24日、山陽・九州)の内。 ※『山陽新報』(1月5・7日の記事、1月5日の広告)に拠る。	
△	一九二八	昭和3	3/7~8	神戸 八千代座	(碁太平記白石 噺) 新吉原揚屋の段(鑊=新左衛門)。 ※『神戸新聞』(2月26・28~29日・3月1~6日の記事、2月28~29日・3月1~8日の広告)に拠る。	
			3/14~15	名古屋 御園座	碁太平記白石噺 浅草雷門の段(口 播路=勝三郎、奥 相生=芝之助)、吉原揚屋の段(切 鑊=新左衛門)。 ※大阪文楽座巡業(3月1~20日、神戸・名古屋・広島)の内。	娘おのぶ(扇太郎)、どぢやう(玉徳)、大黒屋宗六(政亀)、勘九郎(玉市)、傾城宮城野(栄三)。
	一九二八	昭和3	10/1~	弁天座	碁太平記白石噺 浅草雷門の段(宮、佐久、津磨、文字栄、隅尾、駒司、源左、源喜、源賀、長、源平、叶美、常子、小松、伊達喜、照、隅栄、駒尾、駒登=稲丸、他、奥 文字=勝平)、新吉原揚屋の段(切 土佐=吉兵衛)。 ※実際の上演は竹本文字太夫からで、「浅草雷門の段」19名の太夫は番付面だけのユーレイ(『文楽興行記録 昭和篇』に拠る)。	妹おのぶ(紋十郎)、飴売どぢやう(玉幸)、大黒屋宗六(玉次郎)、勘九郎(玉市)、傾城宮城野(文五郎)。
△	一九二九	昭和4	1/8~10	神戸 八千代座	(白石噺) 揚屋。 ※『神戸新聞』(1月8~10日の記事、1月9日の広告)に拠る。	(不明)
△	一九二九	昭和4	1/17~18	名古屋 御園座	(碁太平記白石 噺) 揚屋の段(土佐=吉兵衛)。 ※大阪文楽座巡業(1月15~25日、名古屋・岐阜・豊橋)の内。 ※『御園座七十年史』、『御園座八十年史』、『御園座百年史』、『新愛知』(1月17~18日の記事、1月17日の広告)に拠る。	信夫(紋十郎)、大黒屋宗六(玉次郎)、宮城野(文五郎)。

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一九二九	昭和4	2/5	岡山 岡山劇場	(碁太平記白石噺) 浅草の段(島=浅造)、新吉原揚屋の段(土佐=吉兵衛)。 ※大阪文楽座巡業(2月4~22日、山陽・九州)の内。 ※「山陽新報」(1月22日・2月1・5日の記事、2月2日の広告)に拠る。	(不明)
△	一九二九	昭和4	3以前	東京 報知新聞社講堂	(碁太平記白石噺) 浅草雷門の段(口さ路、奥米)、新吉原揚屋の段(香伯=団左衛門)。 ※人形芝居設立記念公演第3回。 ※『浄瑠璃雑誌』第278号に拠る。	しのぶ(徳三郎)、どじやう(玉徳)、宗六(新造)、勘九郎(兵松)、宮城野(小兵吉)。
△	一九二九	昭和4	4/6	東京浅草 並木倶楽部	(碁太平記白石噺) 揚屋の段(生駒=泰助)。 ※浄瑠璃研究会・歌声会春季合同大会。 ※『浄瑠璃雑誌』第278号に拠る。	
	一九二九	昭和4	7/10~13	東京 新橋演舞場	碁太平記白石噺 浅草雷門の段(口辰/播路/隅栄=団伊三/清若、奥島=浅造)、 吉原揚屋の段(切録=新左衛門)。	娘しのぶ(紋十郎)、飴売どぢよ(玉市)、大黒屋宗六(玉次郎)、勘九郎(文作)、傾城宮城野(文五郎)。
△	一九二九	昭和4	9/20	東京 三越ホール	(白石) 揚屋(宮城一巖・宮柴一生駒・信夫一君・亭主一滝・宮里一和国=紋左衛門)。 ※第9回浄瑠璃研究会。 ※『浄瑠璃雑誌』第282号に拠る。	
	一九三〇	昭和5	8/23	東京 東京劇場	碁太平記白石噺 吉原揚屋の段(録=新左衛門)。 ※素浄瑠璃。	
△	一九三〇	昭和5	12/2	四日市 湊座	(白石) (源平=吉男)。 ※文楽座若手人形浄瑠璃。桐竹門造後見女兒一人遣い人形入。 ※『浄瑠璃雑誌』第298号に拠る。	
	一九三〇	昭和5	12/5~25	四ツ橋文楽座	碁太平記白石噺 浅草雷門より 新吉原揚屋迄 浅草雷門の段(手品師豆造事どじょう一鳥・勘九郎一長尾・宗六一浪花/文・おのぶ一長子・亭主一辰/播路=歌助/芳之助)、新吉原揚屋の段(切録=新左衛門)。 ※千種楽は『文楽興行記録昭和篇』に拠る。	妹おのぶ(紋十郎)、手品師豆造事どじょう(玉幸)、大黒屋宗六(玉松)、金貸勘九郎(扇太郎)、傾城宮城野(文五郎)。
△	一九三一	昭和6	1/28	竹本土佐太夫 邸	(白石噺) 田植(土佐子=吉季)。 ※大序会。 ※『浄瑠璃雑誌』第300号に拠る。	
	一九三一	昭和6	7/21~23	東京 明治座	碁太平記白石噺 新吉原揚屋の段(中鏡=吉左、切土佐=吉兵衛)。	妹おのぶ(紋十郎)、豆造事どじょう(玉造)、大黒屋宗六(栄三)、金貸勘九郎(文作)、傾城宮城野(文五郎)。
△	一九三一	昭和6	8/9	岡山 柳川座	(白石) 揚屋(文)。 ※連合浄瑠璃大会。 ※『浄瑠璃雑誌』第304号に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一九三一	昭和6	10/1~18	地方公演 (九州・中国・四国)	(碁太平記白石噺) 新吉原揚屋の段(南部=広助)。 ※竹本土佐太夫一行巡業。10月8日広島・寿座、12日松山・国伎座、16日徳島・稲荷座での公演を含む。 ※「中国新聞」(10月2・9~10日の記事、10月2・6・8日の広告)、「海南新聞」(10月8・13日)、「大阪朝日新聞(徳島版)」(10月13日)、「徳島毎日新聞」(10月15~17日)、『浄瑠璃雑誌』第306号に拠る。	(不明)
△	一九三一	昭和6	11/22~23	京都華頂会館	(白石噺) 揚屋。 ※大阪文楽座若手人形浄瑠璃公演会。主催豊沢猿二郎。 ※「京都日日新聞」(11月23日)に拠る。	
	一九三一	昭和6	12/8~10	東京明治座	碁太平記白石噺 浅草雷門の段(南部=吉弥)、吉原揚屋の段(切 鋳=新左衛門)。	妹おのぶ(紋十郎)、飴売どちよう(玉徳)、大黒屋宗六(玉松)、金貸勘九郎(市松)、傾城宮城野(文五郎)。
△	一九三二	昭和7	5/5	名古屋御園座	(碁太平記白石噺) 吉原揚屋(陸路=団二郎)。 ※竹本鋳太夫一行巡業(5月4~14日、東海)の内。文楽座の若手による素浄瑠璃。 ※「新愛知」(5月1・3~8日)、『浄瑠璃雑誌』第312号、『御園座七十年史』に拠る。	
△	一九三二	昭和7	7/7	姫路山陽座 〈竹本座〉	(碁太平記白石噺) 揚屋(昇=竜二郎)。 ※『浄瑠璃雑誌』第314号に拠る。	
	一九三二	昭和7	10/24	東京東京劇場	碁太平記白石噺 田植の段(佐久=新太郎)。 ※太夫役割は筋書に拠る。『義太夫年表 昭和篇』には竹本叶美太夫とある。	
			10/27・28		揚屋の段(文=寛市)。 ※素浄瑠璃。	
△	一九三二	昭和7	12/16~24	地方公演 (四国)	(碁太平記白石噺) 揚屋(文=卯三郎)。 ※竹本津太夫一行巡業。12月19日今治・和泉座、23日高松・大衆座での公演を含む。 ※『浄瑠璃雑誌』第319号、「海南新聞」(12月16日)、「香川新報」(12月20日)に拠る。	
△	一九三三	昭和8	2/4	松屋町鳳来館 〈竹本座〉	(白石) (滝)。	
			2/19	鶴橋劇場 〈竹本座〉	(碁太平記白石噺) 揚屋(滝)。 ※竹本座巡業(2月1~19日、大阪)の内。 ※『浄瑠璃雑誌』第320号に拠る。	
△	一九三三	昭和8	2/19	東京浅草並木倶楽部	(白石) (音羽=団四郎)。 ※第11回浄瑠璃講究会。 ※『浄瑠璃雑誌』第321号に拠る。	
△	一九三三	昭和8	2/20	松屋町実業会館	(白石噺) 田植(叶美=吉季)。 ※若手会。桐竹門造指導乙女人形入。 ※『浄瑠璃雑誌』第321号に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
一九三三	昭和8	5/1~21	四ツ橋文楽座	碁太平記白石噺	吉原揚屋の段（宗六一文字・宮城野一小春・宮里一播路・宮柴一文字 栄改め 常子・おのぶ一綾改め むら＝勝平）。	妹おのぶ（扇太郎）、大黒屋宗六（玉次郎）、 傾城宮城野（紋十郎）。	
△	一九三三	昭和8	6/10	実業会館	（碁太平記白石 噺） 揚屋（文＝喜代之助）。 ※研義会。乙女文楽人形入。 ※『浄瑠璃雑誌』第324号に拠る。		
△	一九三三	昭和8	6/22 6/24	高知 堀詰座	（白石噺） （白石） 揚屋（南部＝吉左）。 田植（土佐子＝市松）。 ※竹本土佐太夫一行巡業（6月22～26日、高知）の内。 ※『浄瑠璃雑誌』第325号に拠る。		
△	一九三三	昭和8	7/10~12	東京 東京劇場	碁太平記白石噺	新吉原揚屋の段（宮城野一小春・おのぶ一むら・宮里一佐久・宮柴一 土佐子・宗六一鏡＝重造／吉左）。	妹おのぶ（扇太郎）、大黒屋宗六（玉次郎）、 傾城宮城野（紋十郎）。
△	一九三三	昭和8	7/14~	地方公演 （九州）	（白石） （文＝卯三郎）。 ※竹本津太夫一行巡業。 ※『浄瑠璃雑誌』第325号に拠る。		
△	一九三三	昭和8	7/26~27	神戸 松竹劇場	（碁太平記白石 噺） （小春）。 ※大阪文楽座人形浄瑠璃若手花形銷夏競演大会。 ※『浄瑠璃雑誌』第326号、「神戸新聞」（7月20～23日の記事、7月22 日の広告）に拠る。		
△	一九三三	昭和8	8/19	紀州田辺 常磐座	（白石噺） 揚屋の段（文＝卯三郎）。 ※「紀伊新報」（8月12日）、『浄瑠璃雑誌』第326号に拠る。		
△	一九三四	昭和9	3/25	長浜 日比劇場	（碁太平記白石 噺） 白七（文＝六之助）。 ※まこと改め竹本松栄太夫披露会。桐竹門造指導少女人形入。 ※『浄瑠璃雑誌』第332号に拠る。		
△	一九三四	昭和9	3/29	福井 加賀屋座	（白石） 揚屋の段（文＝六之助）。 ※桐竹門造指導少女人形入。 ※『浄瑠璃雑誌』第332号に拠る。		
△	一九三四	昭和9	4/1~22	四ツ橋文楽座	碁太平記白石噺	吉原揚屋の段（南部＝吉弥）。	妹おのぶ（扇太郎）、大黒屋宗六（玉次郎）、 傾城宮城野（紋十郎）。
△	一九三四	昭和9	7/25~ 8/15	満州	（碁太平記白石 噺） 揚屋（文＝富平）。 ※竹本叶太夫一行満州巡業。7月26日大連検番ホール、28日昭和園（市 営公会堂）（三味線不明）、8月4日奉天演芸館（三味線不明）、8日撫 順筑紫館広間（三味線不明）での公演を含む。 ※『浄瑠璃雑誌』第335号に拠る。		
△	一九三四	昭和9	7/30~31	東京 歌舞伎座	碁太平記白石噺	浅草雷門の段（口辰＝団二郎、奥鑊＝新左衛門）、新吉原揚屋の段 （切土佐＝吉兵衛）。	妹おのぶ（扇太郎）、飴売どじょう（玉幸）、 大黒屋宗六（玉次郎）、金貸勘九郎（玉市）、 傾城宮城野（文五郎）。
△	一九三四	昭和9	9/13	東京 木村屋別館	（碁太平記白石 噺） 揚屋（都＝桑造）。 ※鶴沢司好発起勉強会。 ※『浄瑠璃雑誌』第335号に拠る。		
△	一九三四	昭和9	10/1	東京 電気倶楽部	（白石） 白石揚屋（宮城野一越喜・信夫一岬＝団七）。 ※第1回東京義太夫新興会。 ※『浄瑠璃雑誌』第335号に拠る。		

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一九三四	昭和9	10/25	京城	(碁太平記白石噺) 揚屋(文)。 ※放送出演。 ※『浄瑠璃雑誌』第336号に拠る。	
△	一九三五	昭和10	6/3	博多大博劇場	(碁太平記白石噺) 新吉原揚屋の段(小春=芳之助)。 ※豊竹古靱太夫一行巡業(5月28日~6月14日、山陽・九州)の内。 ※『浄瑠璃雑誌』第340号に拠る。	(不明)
	一九三五	昭和10	7/1~	堀江演舞場 〈竹本座〉	碁太平記白石噺 明神の森の段(正雪=利根・谷五郎=長美=新吉)、田植の段(滝=仙糸)、逆井村の段(利根=竜二郎、鷹=新吉)、浅草雷門の段(長美=六造、敷嶋=新三郎)、新吉原揚屋の段(大庫=竜二郎、滝=仙糸、栄=六之助)。	由井正雪(兵松)、金江谷五郎(要助)、志賀団七(武夫)、与茂作(源次郎)、娘おのぶ(半八)、庄屋七郎兵衛(薫ル)、女房おさよ(花吉)、どぢやう(兵松)、大黒や宗六(茂明)、観九郎(庄三郎)、傾城宮城野(徳三郎)。
△	一九三五	昭和10	8/22	浪花座	(白石) (和泉=友衛門)。 ※文楽若手浄瑠璃会納涼浄瑠璃。 ※「大阪毎日新聞」(8月21日の広告)、『浄瑠璃雑誌』第342号に拠る。	
	一九三五	昭和10	9/25~26	京都市南座	碁太平記白石噺 吉原揚屋の段(小春=重造)。	傾城宮城野(紋十郎)。
△	一九三六	昭和11	2/2	松本建國座	(碁太平記白石噺) 雷門より吉原揚屋の段。 ※大阪文楽座巡業(2月2~10日、長野・愛知・静岡)の内。2月6日長野・上田劇場(役割不明)で同公演あり。 ※「信濃毎日新聞」(1月30日・2月4日)、『浄瑠璃雑誌』第346号に拠る。	(不明)
△	一九三六	昭和11	4/6~7	名古屋御園座	(白石噺) 雷門(和泉=叶)、揚屋(綴=新左衛門)。 ※大阪文楽座巡業(4月2日~、東海)の内。 ※「新愛知」(3月26・28~29日・4月1~3・5・7日の記事、3月27・30~31日・4月1・6日の広告)、『浄瑠璃雑誌』第347号に拠る。	(不明)
△	一九三六	昭和11	4/12~14	神戸松竹劇場	(碁太平記白石噺) 浅草雷門の段(どぢやう=長尾・勘九郎=播路・宗六=淀路・おのぶ=一の・亭主=駒尾=寛市)、新吉原揚屋の段(切駒=清二郎)。 ※「神戸新聞」(4月9・12・15~16日の記事、4月10・15日の広告)、『浄瑠璃雑誌』第347号に拠る。	おのぶ(光之助)、どぢやう(玉幸)、大黒屋宗六(玉蔵)、勘九郎(門造)、宮城野(紋十郎)。
△	一九三六	昭和11	10/10	釜山釜山劇場 〈新義座〉	(碁太平記白石噺) ※大阪文楽新義座巡業(10月10日~12月、満州・九州・中国・四国)の内。乙女人形入。 ※「大阪朝日新聞(朝鮮版)」(10月6日)に拠る。	
△	一九三七	昭和12	1/19	豊橋豊橋劇場 〈新義座〉	(白石噺) 揚屋の段。 ※『浄瑠璃雑誌』第357号、「豊橋日日新聞」(1月14~19日)に拠る。	
		2/17	徳島徳島温泉劇場 〈新義座〉	(碁太平記白石噺) 吉原揚屋の段(越名=勝之介)。 ※新義座巡業(1月19日~3月中旬、東海・関東・東北・北陸・四国・山陽)の内。 ※「徳島毎日新聞」(2月9・15~18日)に拠る。		

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
△	一九三七	昭和12	4/5	彦根 大正館 〈新義座〉	(碁太平記白石 噺)	揚屋(越名=綱延)。 ※『文楽興行記録昭和篇』書入れに拠る。	
			4/26	静岡 若竹座 〈新義座〉		揚屋(津磨=綱延)。 ※大阪新義座巡業(4月4~28日、東海・関東)の内。乙女人形入。 ※『文楽興行記録昭和篇』書入れに拠る。	
△	一九三七	昭和12	5/9	岡山 岡山劇場 〈新義座〉	(碁太平記白石 噺)	揚屋(越名)。 ※「山陽中国合同新聞」(5月7・9日)に拠る。	
△	一九三七	昭和12	6/9	ラジオ放送	(碁太平記白石 噺)	新吉原揚屋の段(巖=猿蔵)。 ※「東京朝日新聞」「東京日日新聞」(6月9日)に拠る。	
△	一九三七	昭和12	10/24	北陽演舞場 〈新義座〉	(白石噺)	揚屋(越名=勝之介)。 ※『浄瑠璃雑誌』第365号、『浄瑠璃時報』第193号、『太棹』第90号に拠る。	
△	一九三七	昭和12	10/27	東京浅草 並木倶楽部	(碁太平記白石 噺)	新吉原揚屋の段(朝見=芳太郎)。 ※日本帝都義太夫因会慰問会。 ※『浄瑠璃雑誌』第365・366号、『浄瑠璃時報』第193・194号、『太棹』第90号に拠る。	
△	一九三七	昭和12	12/6	東京 仁寿生命講堂 〈新義座〉	(碁太平記白石 噺)	新吉原揚屋(越名=勝芳)。 ※『浄瑠璃雑誌』第366・367号、『浄瑠璃時報』第195号、『太棹』第91号に拠る。	
△	一九三八	昭和13	1/27	東京 東京劇場	(碁太平記白石 噺)	揚屋(源=八造)。 ※大阪文楽座義太夫若手花形特別公演。素浄瑠璃。 ※『浄瑠璃雑誌』第368号、「東京朝日新聞」(1月26日の広告)に拠る。	
	一九三八	昭和13	2/4~13	新町演舞場	碁太平記白石噺	浅草雷門の段(口 隅栄=友駒//さの=新太郎//常子=吉季、奥 呂=広助)、新吉原揚屋の段(切 鑢=新左衛門)。	妹おのぶ(紋十郎)、飴売どぢよう(玉幸)、大黒屋宗六(栄三)、勘九郎(玉蔵)、傾城宮城野(文五郎)。
△	一九三八	昭和13	2/8	東京 鈴木演芸場	(碁太平記白石 噺)	揚屋(里)。 ※第2回義太夫会。 ※『浄瑠璃雑誌』第368号、『太棹』第94号に拠る。	
△	一九三八	昭和13	2/17~20	京都 弥栄会館	(碁太平記白石 噺)	新吉原揚屋の段(鑢=新左衛門)。 ※『浄瑠璃雑誌』第368号、「京都日出新聞」(2月12・18・20~21・23日)、「京都日日新聞」(2月21日)、「大阪朝日新聞(京都版)」(2月22日の記事、2月17日の広告)に拠る。	宗六(門造)、宮城野(紋十郎)。
△	一九三八	昭和13	3/14	東京 鈴木演芸場	(碁太平記白石 噺)	揚屋(都=亀造)。 ※第3回義太夫会。 ※『太棹』第94号に拠る。	
△	一九三八	昭和13	3/14	岐阜 金華劇場 〈新義座〉	(碁太平記白石 噺)	揚屋の段(越名=綱延)。 ※大阪新義座巡業(3月中旬、東海・北陸・近畿)の内。乙女人形娘連特別出演。 ※「岐阜日日新聞」(3月11~12・14~16日)に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一九三八	昭和13	3/30	京都 朝日会館	(白石噺) 七ツ目 新吉原揚屋の段(源=八造)。 ※春季第4回文楽浄瑠璃の夕。素浄瑠璃。 ※「大阪朝日新聞(京都版)」(3月30日)に拠る。	
△	一九三八	昭和13	4/21	台湾 栄座 <新義座>	(碁太平記白石噺) 新吉原揚屋の段(越名=勝芳)。 ※大阪新義座巡業(4月20日~、台湾)の内。 ※「台湾日日新報」(4月17・19~20日の記事、4月20日の広告)、 『浄瑠璃雑誌』第369号に拠る。	
△	一九三八	昭和13	7/27	京都 朝日会館 <新義座>	(白石噺) 新吉原揚屋の段(越名=勝芳)。 ※素浄瑠璃。 ※『浄瑠璃雑誌』第372号、「京都日出新聞」(7月25・30日)、「京 都日日新聞」(7月22・30日)に拠る。	
△	一九三八	昭和13	9/15	ラジオ放送	(碁太平記白石噺) 新吉原揚屋の段(源=吉弥)。 ※「大阪朝日新聞」「東京朝日新聞」(9月15日)、『太棹』第100号 に拠る。	
△	一九三八	昭和13	9/29	東京 松屋ホール	(白石) ※大阪文楽人形入浄瑠璃会。野沢道之助会主催、池田三国主宰南北座 後援。 ※『太棹』第99号に拠る。	おのぶ(紋太郎)、惣六(玉幸)、宮城野(政 亀)。
△	一九三八	昭和13	10/25	東京 蚕糸会館	(白石) (朝見=芳太郎)。 ※東京浄瑠璃人形芝居秋季特別公演。 ※『浄瑠璃雑誌』第376号は26日の演目とする。 ※『太棹』第99号、『浄瑠璃雑誌』第376号に拠る。	しのぶ(国三郎)、惣六(清三郎)、宮城野 (国五郎)。
△	一九三九	昭和14	1/27	東京 日本橋倶楽部	(白石噺) 揚屋(都=猿蔵)。 ※東京南北座初春興行。 ※『浄瑠璃雑誌』第377号、『太棹』第101号、『文楽興行記録昭和 篇』書入れに拠る。	しのぶ(国三郎)、宗六(清三郎)、宮城野 (国五郎)。
△	一九三九	昭和14	4/4	京城 朝日座 <新義座>	(碁太平記白石噺) 吉原揚屋の段(越名=綱延)。 ※大阪新義座巡業(4月1~12日、大陸)の内。乙女人形入。 ※「京城日報」(3月30日・4月2日の記事、4月5~6日の広告)、『浄 瑠璃雑誌』第378号に拠る。	
△	一九三九	昭和14	5/3	東京 日本橋倶楽部	(白石噺) 新吉原揚屋(松江=延左衛門)。 ※南北座春季公演。 ※『浄瑠璃雑誌』第379号、『太棹』第103号に拠る。	しのぶ(国三郎)、宮城野(国五郎)。
△	一九三九	昭和14	9/4~5	名古屋 御園座	(碁太平記白石噺) 揚屋の段(伊達=友衛門)。 ※『浄瑠璃雑誌』第382号、『御園座七十年史]、「新愛知」(9月1~ 3・5~6日の記事、9月1~7日の広告)に拠る。	
	一九三九	昭和14	11/1~	四ツ橋文楽座	碁太平記白石噺 新吉原揚屋の段(宮城野一南部/伊達・おのぶ一伊達/南部・宮里一 辰/播路・宮柴一竹・宗六一織=重造/友衛門)。	妹おのぶ(光之助)、大黒屋宗六(政亀)、傾 城宮城野(紋十郎)。
△	一九四〇	昭和15	3/28	堀江演舞場	(白石噺) 揚屋の段(掛合 宮城野一南部・信夫一伊達・宮柴一さの・宮里一土佐 夫・宗六一土佐=友衛門)。 ※土佐会25周年記念浄瑠璃大会。 ※『太棹』第114号、『浄瑠璃雑誌』第389号に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
△	一九四〇	昭和15	5/9	東京 日本橋倶楽部	(碁太平記白石 噺)	揚屋(巖=猿蔵)。 ※日本義太夫因会春季大会。 ※『太棹』第114号に拠る。	
△	一九四〇	昭和15	6/5	東京 日本橋倶楽部	(白石噺)	吉原揚屋の段(巴=猿喜知)。 ※東京浄瑠璃人形芝居南北座春季公演。 ※『浄瑠璃雑誌』第389号に拠る。	しのぶ([]三春)、宗六(国五郎)、宮城野 (池田三国)。
△	一九四〇	昭和15	10/8	東京 日本橋倶楽部	(碁太平記白石 噺)	田植(扇=宗之助)。	
					(白石)	(掛合 宮城野一東・宮里十宮柴一駒登・しのぶ一朝見・宗六一弥国=猿之助)。 ※日本義太夫因会男子部秋季大会。 ※『太棹』第119号、『浄瑠璃雑誌』第394号に拠る。	
	一九四一	昭和16	6/1~22	四ツ橋文楽座	碁太平記白石噺	吉原揚屋の段(切 古靱=清六)。 ※角書「宮城野/おのぶ」。 ※千種楽は『文楽興行記録昭和篇』書入れに拠る。	妹おのぶ(文作)、大黒屋宗六(栄三)、傾城 宮城野(文五郎)。
△	一九四一	昭和16	8/29	東京 神田錦橋閣	(白石噺)	五段目 逆井村の段(殿母=亀造)。 ※第36回素玄浄曲研究会。 ※『太棹』第128号に拠る。	
△	一九四一	昭和16	10/3	東京 国民新劇場	(白石)	揚屋(都=新造)。	宮城野(池田三国カ)。
			10/6			揚屋(土佐子=新造)。 ※南北座秋季公演。 ※『太棹』第130号、『演芸画報』(昭和16年11月)に拠る。	(不明)
△	一九四二	昭和17	4/10	東京浅草 並木倶楽部	(碁太平記白石 噺)	揚屋(杣=松市郎)。 ※日本義太夫因会春季大会。 ※『太棹』第134号、『浄瑠璃月報』第42号に拠る。	
△	一九四二	昭和17	10/28	京都 朝日会館	(碁太平記白石 噺)	新吉原揚屋の段(源=八造)。 ※国粋古典芸術鑑賞会主催、第13回秋季文楽浄瑠璃の夕。 ※「朝日新聞(大阪・京都版)」(10月25~26日の広告)に拠る。	
△	一九四二	昭和17	12/18	日本橋倶楽部	(白石)	(巴=猿喜知)。 ※竹本路太夫襲名披露義太夫大会。竹本弥国太夫の路太夫襲名を披露。 ※『浄瑠璃月報』第58号、『太棹』第140号に拠る。	
△	一九四三	昭和18	4/26	岡島会館	(碁太平記白石 噺)	明神の森の段(正雪=松島・谷五郎=利根=一郎右衛門)、田植の段(文字=団伊三)、逆井村の段(中 浜=仙松、次 つばめ=錦糸、奥 隅若=徳若)、浅草の段(宮=新太郎)、新吉原揚屋の段(雛=勝太郎)。 ※日本因協会主催第5回若手技芸奨励会。 ※『浄瑠璃雑誌』第419号に拠る。	

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
一九四三	昭和18	5/1~23	四ツ橋文楽座	碁太平記白石噺	浅草雷門の段（口 富=叶太郎//千駒=団伊三、奥 長尾=清八）、吉原揚屋の段（切 重=広助）。 ※千種楽は「毎日新聞（大阪版）」（5月22日）、『浄瑠璃雑誌』第421号に拠る。	娘おのぶ（紋司）、手品師豆蔵事どちよう（玉徳）、大黒屋宗六（政亀）、勘九郎（玉市）、傾城宮城野（光造）。	
△	一九四三	昭和18	9/13	東京 すゞ本	（碁太平記白石噺）	揚屋（都=新造）。 ※義太夫錬成道場義太夫会。 ※『浄瑠璃月報』第77号、『太棹』第148号に拠る。	
△	一九四四	昭和19	9/1~	四ツ橋文楽座	碁太平記白石噺	吉原揚屋の段（宮城野一南部/伊達・妹おのぶ一宮・宮里一司・宮柴一松島・大黒屋宗六一住/呂=仙糸）。	娘おのぶ（紋司）、大黒屋宗六（玉市）、傾城宮城野（光造）。
△	一九四五	昭和20	9/13~16	京都 南座	（碁太平記白石噺）	吉原揚屋の段（一日替り 伊達/南部）。 ※『昭和の南座 資料編（上）』、『文楽人形の芸術』、「京都新聞」（8月27~28・30~31日・9月1・6~7・12~13日の広告）に拠る。	（不明）
	一九四五	昭和20	9/19~23	朝日会館	碁太平記白石噺	新吉原揚屋の段（一日替り 南部=寛治郎//伊達=喜左衛門）。	妹おのぶ（紋司）、大黒屋宗六（玉助）、傾城宮城野（紋十郎）。
	一九四七	昭和22	3/1~23	四ツ橋文楽座	碁太平記白石噺	浅草雷門の段（松=清二郎）、吉原揚屋の段（切 呂=友衛門）。	妹おのぶ（紋昇）、飴売どちよう（玉男）、大黒屋宗六（玉市）、勘九郎（亀三）、傾城宮城野（亀松）。
	一九四八	昭和23	9/11~16	東京 東京劇場	碁太平記白石噺	吉原揚屋の段（宮城野一雛/松・妹おのぶ一松/雛・宮里一隅若・宮柴一司・宗六一つばめ=綱造）。 ※「東劇グラフ」は宮城野の太夫役割を（源/松）、妹おのぶを（浜/松）とする。	娘おのぶ（紋之助）、大黒屋宗六（玉徳）、傾城宮城野（亀松）。
△	一九四九	昭和24	10/9	宇治山田市 平和座 〈組合〉	（碁太平記白石噺）	揚屋の段。 ※伊勢路巡業（10月7~9日）の内。 ※「夕刊三重」（10月18日の広告）に拠る。	（不明）
△	一九四九	昭和24	10/14	姫路 姫路市公会堂 〈組合〉	（碁太平記白石噺）	吉原揚屋の段（越名）。 ※播州路・四国巡業の内。10月15~16日高知・堀詰座（役割不明）で同公演あり。 ※「姫路新聞」（10月8日）、「高知新聞」（10月2・8・14日の広告）に拠る。	（不明）
	一九五〇	昭和25	3/9~13	東京 新橋演舞場 〈因会〉	碁太平記白石噺	吉原揚屋の段（傾城宮城野一綱・妹おのぶ一松・女郎宮里一隅若・女郎宮柴一宮・大黒屋宗六一大隅=清八）。	妹おのぶ（紋司）、大黒屋宗六（玉市）、傾城宮城野（亀松）。
△	一九五〇	昭和25	7/5	ラジオ放送 〈組合〉	（白石噺）	（伊達、他）。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」（7月5日）に拠る。	
△	一九五〇	昭和25	7/18~20	名古屋 名古屋合唱団 ホール 〈組合〉	（碁太平記白石噺）	新吉原揚屋（つばめ・越名・古住・呂賀・司=勝太郎）。 ※名古屋・岐阜巡業（7月10日~、10日間）の内。 ※チラシ、『文楽興行記録昭和篇』書入れに拠る。	宗六（玉徳）、宮城野（紋昇）。

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
一九五一	昭和26	2/3~13	四ツ橋文楽座 〈因会〉	碁太平記白石噺	新吉原揚屋の段（傾城宮城野一雛・妹おのぶ一宮／長子・女郎宮里一長子／宮・女郎宮柴一弘・遣り手お政一相次・大黒屋宗六一山城少掾＝清八）。 ※角書「姉は宮城野／妹はおのぶ」。 ※府民劇場。 ※千種楽は『松竹百年史』に拠る。	妹おのぶ（文雀）、大黒屋宗六（玉市）、傾城宮城野（栄三）。
一九五一	昭和26	6/1~6	東京 三越劇場 〈三和会〉	碁太平記白石噺	雷門の段（口 呂賀＝団作、奥 七五三＝叶太郎）、揚屋の段（伊達＝喜左衛門）。 ※桐竹紋昇改め二代目桐竹勘十郎襲名披露。	妹信夫（紋之助）、飴売どじょう（紋二郎）、大黒屋宗六（玉徳）、勘九郎（作十郎）、傾城宮城野（紋十郎）。
一九五一	昭和26	6/4~	地方公演 （北陸・北海道・東北・信州） 〈因会〉	碁太平記白石噺 浅草雷門より 吉原揚屋まで	浅草雷門の段（河内＝清友）、吉原揚屋（傾城宮城野一松・妹おのぶ一越名・女郎宮里一織部・女郎宮柴一織の・大黒屋宗六一河内＝八造）。	おのぶ・妹おのぶ（玉五郎）、どじょう（玉男）、大黒屋宗六（栄三）、勘九郎（玉助）、傾城宮城野（亀松）。
一九五二	昭和27	1/26~27	四ツ橋文楽座 〈因会〉	碁太平記白石噺	吉原揚屋の段。 ※女義太夫合同初公演。	妹おのぶ（文雀）、大黒屋宗六（玉市）、傾城宮城野（亀松）。
一九五二	昭和27	2/21~22	京都 南座 〈因会〉	碁太平記白石噺	吉原揚屋の段。 ※日本因協会女義太夫合同初公演。	妹おのぶ（文雀）、大黒屋宗六（玉市）、傾城宮城野（亀松）。
一九五二	昭和27	3/1~23	四ツ橋文楽座 〈因会〉	碁太平記白石噺	吉原揚屋の段（大黒屋宗六一大隅・傾城宮城野一松・妹おのぶ一南部・女郎宮里一静・女郎宮柴一長子＝清八）。 ※角書「姉は宮城野／妹はおのぶ」。 ※千種楽は『幕間』（昭和27年4月）に拠る。 ※竹本綱太夫・竹沢弥七毎日演劇賞受賞記念。	妹おのぶ（文雀）、大黒屋宗六（玉市）、傾城宮城野（亀松）。
一九五二	昭和27	9/27	山本能楽堂 〈因会〉	碁太平記白石噺	浅草雷門の段（おのぶ＋どじょう一織部・観九郎一十九・宗六一織の＝寛弘）、新吉原揚屋の段（南部＝錦糸）。 ※大阪春秋会第2回研究会。	
一九五四	昭和29	2/16~25	京都 弥栄会館 〈因会〉	碁太平記白石噺	新吉原揚屋の段（松＝清六）。	妹おのぶ（文雀）、大黒屋宗六（玉市）、傾城宮城野（栄三）。
一九五四	昭和29	3/15~18	三越劇場 〈三和会〉	碁太平記白石噺	田植の段（与茂作一松島・娘しのぶ一伊達路・志賀台七一古住・百姓丹助＋丹平一呂賀・庄屋七郎兵衛一司＝猿二郎）、雷門の段（口 古住＝団作//呂賀＝勝平、奥 七五三＝友若）、新吉原の段（前 伊達＝喜左衛門、後 源＝叶太郎）。 ※八世野沢吉兵衛・鶴沢友衛門・五世豊竹富太夫・桐竹紋吉・五世（ママ）吉田玉造追善公演。 ※竹本伊達太夫休演、「新吉原の段・前」は竹本源太夫が、後は豊竹司太夫が代演（「新関西」（3月14日）に拠る）。	志賀台七（勘十郎）、与茂作（紋市）、娘しのぶ・しのぶ・妹しのぶ（紋二郎）、庄屋七郎兵衛（紋之助）、手品師どじょう（勘十郎）、大黒屋宗六（辰五郎）、勘九郎（作十郎）、傾城宮城野（紋之助）。
△一九五四	昭和29	5/19	ラジオ放送 〈因会〉	（碁太平記白石噺）	（静、他）。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」（5月19日）に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	一九五四	昭和29	5/26	ラジオ放送 〈因会〉	(碁太平記白石噺) 逆井村の段(綱=弥七)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「毎日新聞(大阪版)」(5月26日)に拠る。	
△	一九五四	昭和29	6/2	ラジオ放送 〈三和会〉	(碁太平記白石噺) (住=勝太郎)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「読売新聞(大阪版)」(6月2日)に拠る。	
△	一九五四	昭和29	6/9	ラジオ放送 〈三和会〉	(碁太平記白石噺) (源=喜左衛門)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「読売新聞(大阪版)」(6月9日)に拠る。	
	一九五四	昭和29	6/15~19	東京 三越劇場 〈三和会〉	碁太平記白石噺 新吉原揚屋の段(前 源=喜左衛門、後 司=猿二郎)。	しのぶ(紋二郎)、大黒屋宗六(辰五郎)、宮城野(紋之助)。
	一九五四	昭和29	9/17~26	四ツ橋文楽座 〈因会〉	碁太平記白石噺 吉原揚屋の段(松=清六)。	妹おのぶ(玉五郎)、亭主宗六(玉男)、傾城宮城野(亀松)。
	一九五四	昭和29	9/30~10/4	四ツ橋文楽座 〈因会〉	碁太平記白石噺 吉原揚屋の段。 ※人形浄瑠璃女義太夫大顔合せ特別公演。	妹おのぶ(文雀)、亭主宗六(玉男)、傾城宮城野(亀松)。
△	一九五四	昭和29	10/24	奈良 奈良県立奈良 商工高等学校 講堂 〈三和会〉	(碁太平記白石噺) ※「大和タイムス」(10月23日)、「読売新聞(奈良版)」(10月24日)に拠る。	(不明)
	一九五四	昭和29	12/2~3	和歌山 和歌山県農業 協同組合講堂 〈因会〉	碁太平記白石噺 吉原揚屋の段(宮城野一南部・おのぶ一織部・宮里一伊達路・宮柴一相子・宗六一織の=広助)。	妹おのぶ(玉昇)、亭主宗六(玉男)、傾城宮城野(栄三)。
	一九五四	昭和29	12/20~22	神戸 八千代劇場 〈因会〉	碁太平記白石噺 吉原揚屋の段(宮城野一南部・おのぶ一織部・宮里一伊達路・宮柴一相子・宗六一織の=広助)。	妹おのぶ(玉昇)、亭主宗六(玉市)、傾城宮城野(栄三)。
	一九五五	昭和30	1/25~27	名古屋 御園座 〈因会〉	碁太平記白石噺 新吉原揚屋の段(松=清六)。	妹おのぶ(玉昇)、亭主宗六(玉市)、傾城宮城野(栄三)。
	一九五五	昭和30	3/25	新潟 新潟劇場 〈因会〉	碁太平記白石噺 新吉原揚屋の段(傾城宮城野一南部・娘しのぶ一織部・傾城宮里一伊達路・傾城宮柴一織の・大黒屋宗六一山城少掾=藤蔵)。 ※巡業(3月16日~、静岡・東北・北陸)の内。	しのぶ(文雀)、宗六(玉男)、宮城野(栄三)。
△	一九五五	昭和30	6/22	ラジオ放送 〈因会〉	(碁太平記白石噺) 新吉原揚屋の段(松=清六)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「毎日新聞(大阪版)」「週刊NHK新聞」(6月19日)に拠る。	
	一九五五	昭和30	11/26~29	東京 新橋演舞場 〈因会〉	碁太平記白石噺 浅草雷門の段(手品師豆蔵実はどじょう一静・大黒屋宗六一長子・娘おのぶ一南部・茶店の亭主一弘・見物人一相次・勘九郎一雛=広助)、吉原揚屋の段(松=清六)。 ※角書「姉は宮城野/妹はおのぶ」。	娘おのぶ(文昇)、どじょう(光次)、大黒屋宗六(玉市)、悪者勘九郎(玉男)、傾城宮城野(亀松)。

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
一九五六	昭和31	2/26	姫路市公会堂 〈三和会〉	碁太平記白石噺	新吉原揚屋の段（源＝叶太郎）。 ※桐竹紋二郎休演のため、信夫を桐竹紋寿が代演（『文楽・女方ひとすじ おつるから政岡まで』に拠る）。	信夫（紋二郎）、宗六（作十郎）、宮城野（紋之助）。
一九五六	昭和31	6/1～8	東京 三越劇場 〈三和会〉	碁太平記白石噺	新吉原揚屋の段（宮城野一源・しのぶ一真砂・宮里一三和・宮柴一若子・やり手一常子・宗六一松島＝叶太郎）。	しのぶ（紋二郎）、宗六（勘十郎）、宮城野（紋之助）。
一九五六	昭和31	8/25～30	三越劇場 〈三和会〉	碁太平記白石噺	新吉原揚屋の段（宮城野一小松・信夫一真砂・宮里一常子・宮柴一若子・やり手一貴代・宗六一松島＝叶太郎）。	信夫（紋二郎）、宗六（辰五郎）、宮城野（紋之助）。
一九五六	昭和31	9/28	下関 東宝劇場 〈三和会〉	碁太平記白石噺	新吉原揚屋の段（宮城野一小松・しのぶ一常子・宗六一松島＝仙二郎）。 ※九州巡業（9月18日～、11日間）の内。	妹しのぶ（紋二郎）、大黒屋宗六（勘十郎）、傾城宮城野（紋之助）。
一九五七	昭和32	11/27～29	東京 新橋演舞場 〈合同〉	碁太平記白石噺 通し	明神の森の段（由井正雪一古住・谷五郎一織の＝藤蔵）、田植の段（つばめ＝喜左衛門）、逆井村の段（中 雛＝八造、前 綱＝弥七、後相生＝松之輔//津＝寛治）、浅草雷門の段（口 古住＝叶太郎、奥 住＝勝太郎）、新吉原揚屋の段（宮城野一土佐・妹信夫一南部・宮里一織部・宮柴一織の・禿しげり一相子・惣六一相生＝藤蔵）。 ※芸術祭第4回文楽合同公演。 ※11月28日「田植の段」「逆井村の段」ラジオ放送（「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」「読売新聞（大阪版）」（11月28日）に拠る）。	正雪（玉助）、谷五郎（紋十郎）、団七（勘十郎）、与茂作（淳造）、信夫・妹信夫（紋二郎）、庄屋（玉市）、婆さよ（国秀）、どぜう（玉五郎）、惣六（勘十郎）、勘九郎（玉助）、宮城野（栄三）。
一九五八	昭和33	5/23～24	神戸 神戸新聞会館 〈三和会〉	碁太平記白石噺	浅草雷門の段（宗六一古住・勘九郎一松島・どじょう十亭主一小松・信夫一常子）、新吉原揚屋の段（切 源＝叶太郎）。 ※三和会自立10周年記念公演。	信夫（紋二郎）、手品師どじょう（勘十郎）、大黒屋宗六（辰五郎）、勘九郎（作十郎）、傾城宮城野（紋之助）。
一九五九	昭和34	2/17～20	東京 新橋演舞場 〈合同〉	碁太平記白石噺	吉原揚屋の段（松＝清六）。	妹信夫（紋之助）、大黒屋惣六（玉助）、宮城野（栄三）。
一九六〇	昭和35	4/18	石川 山中温泉昭和館 〈両派〉	碁太平記白石噺	揚屋の段。 ※見台披露浄瑠璃大会。	しのぶ（文昇）、宗六（玉市）、宮城野（玉五郎）。
一九六〇	昭和35	8/13～28	道頓堀文楽座 〈因会〉	碁太平記白石噺	新吉原揚屋の段（土佐／松＝藤蔵）。	娘おのぶ（文雀）、大黒屋宗六（玉市）、傾城宮城野（栄三）。
一九六一	昭和36	4/18	東京 新橋演舞場 〈合同〉	碁太平記白石噺	新吉原揚屋の段（つばめ＝喜左衛門）。 ※第2回文楽素浄瑠璃の会。	
一九六二	昭和37	6/26～7/1	東京 三越劇場 〈三和会〉	碁太平記白石噺	浅草雷門の段（勘九郎一文字・宗六一松島・どじょう十亭主一小松・信夫一若子＝燕三）、吉原揚屋の段（切 源＝叶太郎）。	信夫（簗助）、どじょう（紋弥）、宗六（辰五郎）、勘九郎（作十郎）、宮城野（清十郎）。
△一九六三	昭和38	10/24・31	ラジオ放送	（碁太平記白石噺）	新吉原揚屋（南部＝勝太郎）。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」「読売新聞（大阪版）」（10月24日）に拠る。	

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
一九六三	昭和38	10/28~11/15	地方公演 (東北・北海道)	碁太平記白石噺	新吉原揚屋の段(つばめ=喜左衛門)。 ※文楽協会誕生記念。 ※竹本相生太夫休演のため、一部配役変更あり。「新吉原揚屋の段」(土佐/春子=重造)。	娘おのぶ(簗助)、大黒屋宗六(玉男)、傾城宮城野(亀松)。	
△	一九六四	昭和39	4/29	ラジオ放送	(碁太平記白石噺) (綱=弥七)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「毎日新聞(大阪版)」(4月29日)に拠る。		
△	一九六四	昭和39	6/28	長野 長野市市民会館	(碁太平記白石噺) 揚屋。 ※第2回古典芸能鑑賞会。 ※文楽協会資料、『昭和39年度人形浄瑠璃因協会年報』、「文楽友の会通信」第7号、「信濃毎日新聞」(6月23日)に拠る。	(清十郎)、(文昇)。	
	一九六六	昭和41	1/7~16	東京 三越劇場	碁太平記白石噺	新吉原揚屋の段(宮城野一土佐・おのぶ一南部・宮里一若子・宮柴一 小松・宗六一文字=吉兵衛)。	妹おのぶ(文雀)、大黒屋宗六(勘十郎)、傾城宮城野(亀松)。
△	一九六六	昭和41	5/13	竹本綱太夫宅	(碁太平記白石噺) 明神森(文字・相子=団二郎)、田植(小松=弥七)、逆井村(中松香=清治、奥織=勝太郎)、雷門(口小春=勝之輔、奥綱子=燕三)、新吉原揚屋(十九=徳太郎)。 ※第6回大序会。 ※『昭和41年度人形浄瑠璃因協会年報』に拠る。		
△	一九六六	昭和41	7/21	ラジオ放送	(碁太平記白石噺) 新吉原揚屋の段(土佐=吉兵衛)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「毎日新聞(大阪版)」「読売新聞(大阪版)」(7月21日)に拠る。		
△	一九六六	昭和41	9/17	ラジオ放送	(碁太平記白石噺) 雷門(綱=燕三)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「毎日新聞(大阪版)」「読売新聞(大阪版)」(9月17日)に拠る。		
△	一九六七	昭和42	2/28・3/7	ラジオ放送	(碁太平記白石噺) 浅草雷門の段(咲)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「毎日新聞(大阪版)」「読売新聞(大阪版)」(2月28日)に拠る。		
	一九六七	昭和42	11/28	朝日座	碁太平記白石噺 新吉原揚屋の段。 ※日本素人浄瑠璃会主催人形浄瑠璃大会。素義会に人形参加。	(不明)	
	一九六八	昭和43	4/1~6	毎日ホール	碁太平記白石噺 新吉原揚屋の段(越路=喜左衛門)。 ※文楽協会創立5周年記念・文楽渡欧歓送公演。	妹おのぶ(文雀)、大黒屋宗六(勘十郎)、傾城宮城野(栄三)。	
	一九六九	昭和44	7/2~13	朝日座	碁太平記白石噺 浅草雷門の段(英=勝之輔、咲=団六)、新吉原揚屋の段(南部=松之輔)。	妹おのぶ(簗助)、手品師豆造ことどじょう(文昇)、大黒屋宗六(亀松)、金貸勘九郎(紋弥)、傾城宮城野(栄三)。	
	一九六九	昭和44	7/14~15	朝日座	碁太平記白石噺 浅草雷門の段(どじょう一松香・おのぶ+亭主一英・勘九郎+宗六一緑=勝之輔)、新吉原揚屋の段(前島=徳太郎、後咲=勝太郎)。 ※第6回文楽若手向上会。	妹おのぶ(一暢)、手品師豆造ことどじょう(昇二郎)、大黒屋宗六(玉幸)、金貸勘九郎(福丸)、傾城宮城野(文昇)。	
△	一九七〇	昭和45	11/17	ラジオ放送	(碁太平記白石噺) (鳥)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「毎日新聞(大阪版)」「読売新聞(大阪版)」(11月17日)に拠る。		

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
一九七一	昭和46	5/23~6/6	東京 国立劇場 小劇場	碁太平記白石噺 通し狂言	明神森の段（常悦一呂・谷五郎一相子=道八）、田植の段（口 緑=団二郎、奥 十九=錦糸）、逆井村の段（中 小松=勝平、切 越路=喜左衛門）、雷門の段（口 英=勝之輔、相生=重造）、揚屋の段（南部=松之輔）。 ※山田庄一=補綴・演出。鶴沢寛治=作曲（「田植の段」）。 ※豊竹十九太夫休演のため、「田植の段・奥」を豊竹小松太夫が代演。桐竹亀松5月27日休演のため、宮城野を吉田文雀が代演（『吉田文雀ノート』に拠る）。	宇治常悦（栄三）、金江谷五郎（清十郎）、志賀台七（玉昇）、百姓与茂作（作十郎）、娘おのぶ（簗助）、庄屋七郎兵衛（玉男）、女房おさよ（文雀）、豆蔵どぜう（文昇）、大黒屋惣六（辰五郎）、悪者観九郎（紋弥）、傾城宮城野（亀松）。
△	一九七一	昭和46		ラジオ放送	（碁太平記白石噺） （小松）。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」（6月15日）に拠る。	
△	一九七二	昭和47		ラジオ放送	（碁太平記白石噺） （南部=松之輔）。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」「読売新聞（大阪版）」（9月10日）に拠る。	
△	一九七三	昭和48		ラジオ放送	（碁太平記白石噺） 新吉原揚屋の段（南部=松之輔）。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」「読売新聞（大阪版）」（3月19日）に拠る。	
	一九七四	昭和49	京都 京都府立文化 芸術会館	碁太平記白石噺	浅草雷門の段（英=清友、呂=重造）、新吉原揚屋の段（越路=喜左衛門）。	妹おのぶ（文雀）、手品師豆造ことどじょう（玉昇）、大黒屋宗六（勘十郎）、金貸勘九郎（作十郎）、傾城宮城野（亀松）。
	一九七五	昭和50	朝 日 座	碁太平記白石噺	浅草雷門の段（津駒=勝司、伊達路=錦糸）、新吉原揚屋の段（南部=喜左衛門）。 ※野沢喜左衛門休演のため、「新吉原揚屋の段」を野沢勝太郎が代演（文楽協会資料、『吉田文雀ノート』に拠る）。吉田玉昇10月15・17日休演のため、大黒屋宗六を吉田作十郎が代演（『吉田文雀ノート』に拠る）。	妹おのぶ（一暢）、手品師豆造ことどじょう（小玉）、大黒屋宗六（玉昇）、金貸勘九郎（玉松）、傾城宮城野（簗助）。
△	一九七六	昭和51		ラジオ放送	（碁太平記白石噺） （伊達路）。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」「読売新聞（大阪版）」（1月21日）に拠る。	
	一九八一	昭和56	朝 日 座	碁太平記白石噺	浅草雷門の段（口 三輪=吉之助、奥 咲=叶太郎）、新吉原揚屋の段（切 南部=燕三）。 ※昭和57年1月15日「新吉原揚屋の段」テレビ放送（「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」「読売新聞（大阪版）」（昭和57年1月8日）、NHKクロニクルに拠る）。	妹おのぶ（紋寿）、手品師豆造ことどじょう（簗太郎）、大黒屋宗六（玉松）、金貸勘九郎（玉女）、傾城宮城野（清十郎）。
	一九八八	昭和63	国立文楽劇場	碁太平記白石噺	田植の段（口 南都=弥三郎、奥 嶋=団六）、浅草雷門の段（口 津梅=団治、奥 伊達=富助）、新吉原揚屋の段（織=燕三）。 ※鶴沢寛治=作曲（「田植の段」）。	志賀台七（玉幸）、百姓与茂作（文昇）、妹おのぶ（紋寿）、庄屋七郎兵衛（玉松）、豆蔵どじょう（簗太郎）、大黒屋惣六（作十郎）、悪者観九郎（玉女）、傾城宮城野（文雀）。
	一九九四	平成6	東京 国立劇場 小劇場	碁太平記白石噺	浅草雷門の段（口 千歳=八介、奥 咲=錦弥）、新吉原揚屋の段（切 嶋=団六）。	妹おのぶ（一暢）、豆蔵どじょう（簗太郎）、大黒屋惣六（文吾）、金貸勘九郎（玉輝）、傾城宮城野（文雀）。

「碁太平記白石噺」上演年表

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
一九九七	平成9	11/1~24	国立文楽劇場	碁太平記白石噺	浅草雷門の段（どじょう一相生・観九郎一緑・惣六一三輪・おのぶ一呂勢・亭主一文字栄＝喜左衛門）、新吉原揚屋の段（切 嶋＝清介）。	妹おのぶ（紋寿）、豆蔵どじょう（簀太郎）、大黒屋惣六（玉幸）、金貨観九郎（玉女）、傾城宮城野（簀助）。
二〇〇八	平成20	8/23~24	愛媛 内 子 座	碁太平記白石噺	浅草雷門の段（口 咲甫＝清志郎、奥 咲＝燕三）、新吉原揚屋の段（前 千歳＝錦糸、切 嶋＝宗助）。 ※第12回内子座文楽。	妹おのぶ（文雀）、豆蔵どじょう（文司）、大黒屋惣六（玉女）、金貨観九郎（勘緑）、傾城宮城野（和生）。
二〇一〇	平成22	5/8~24	東京 国立劇場 小劇場	碁太平記白石噺	浅草雷門の段（口 始＝清丈、奥 千歳＝清介）、新吉原揚屋の段（切 嶋＝清友）。 *「清丈」の丈は異体字。	妹おのぶ（文雀）、豆蔵どじょう（簀二郎）、大黒屋惣六（文司）、金貨観九郎（玉志）、傾城宮城野（和生）。
二〇一一	平成23	4/2~24	国立文楽劇場	碁太平記白石噺	浅草雷門の段（口 始＝寛太郎、奥 呂勢＝清志郎）、新吉原揚屋の段（切 嶋＝団七）。 ※豊竹始太夫休演のため、「雷門の段・口」を豊竹芳穂太夫が代演。 *「芳穂」の芳は異体字。	妹おのぶ（簀助）、豆蔵どじょう（勘緑／幸助）、大黒屋惣六（玉也）、金貨観九郎（幸助／勘緑）、傾城宮城野（清十郎）。
二〇一五	平成27	10/31~ 11/23	国立文楽劇場	碁太平記白石噺	田植の段（口 小住＝清公、奥 松香＝清友）、浅草雷門の段（口 希＝龍爾、奥 津駒＝寛治）、新吉原揚屋の段（英＝清介）。 ※鶴沢寛治＝作曲（「田植の段・口」）。 ※竹本津駒太夫休演のため、「浅草雷門の段・奥」を豊竹咲甫太夫が代演。	志賀台七（文司）、百姓与茂作（玉輝）、妹おのぶ（一輔）、庄屋七郎兵衛（清五郎／簀一郎）、豆蔵どじょう（勘市）、大黒屋惣六（勘寿）、悪者観九郎（玉勢）、傾城宮城野（清十郎）。
二〇二一	令和3	1/3~24	国立文楽劇場	碁太平記白石噺	浅草雷門の段（口 南都＝団吾、奥 咲＝燕三）、新吉原揚屋の段（呂＝清介）。 ※鶴沢清治文化功労者顕彰記念。「日本博」参画プロジェクト。 ※吉田文昇休演のため、妹おのぶを吉田簀紫郎が代演。	妹おのぶ（文昇）、豆蔵どじょう（勘市）、大黒屋惣六（玉也）、悪者観九郎（玉勢）、傾城宮城野（和生）。
二〇二二	令和4	8/20	国立文楽劇場	碁太平記白石噺	逆井村の段（千歳＝富助）。 ※第25回文楽素浄瑠璃の会。	